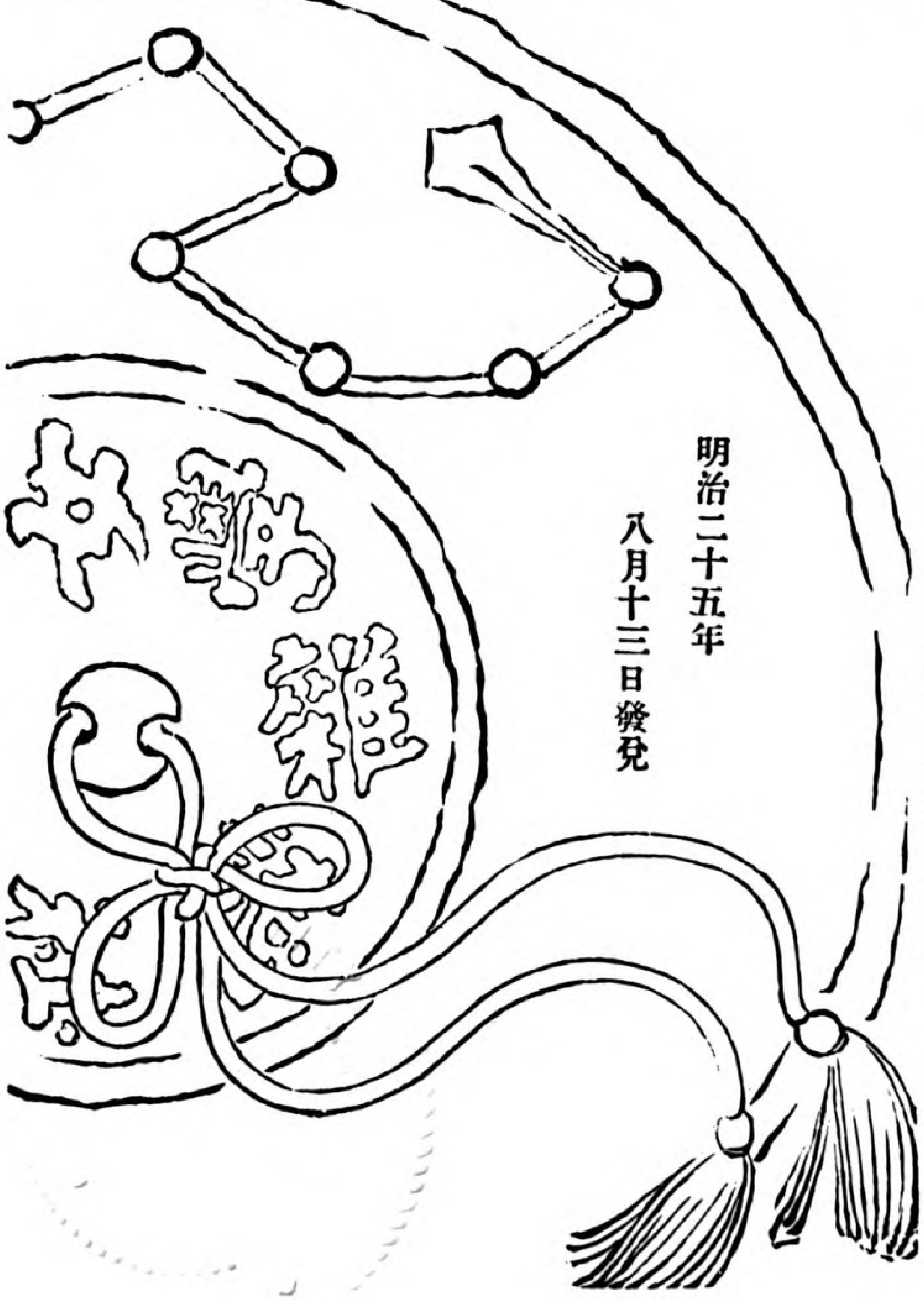
Aug. 1892
no. 325-1

女學雜誌

第三百二拾五號
甲の巻



明治二十五年
八月十三日發兌

注意

史傳(封建君臣の好標本) 白河樂翁公(の評傳は此の良紳士を敬慕する人の一讀に價ひす) 禪窟雜感(は天知子が鎌倉建長寺に入り目下坐禪修練ある間の雜感也) 別離(はしのぶ氏が其愛生に別るゝ情の緻を寫) 洋行の箴一則は何故に洋行歸朝者に拜金、虚飾、不眞面目等の常弊あるやを理辭し且つ戒しむ 片々(欄內) 各地青年に告ぐる(の一篇は是非とも各地の同志者の一讀を要め、今后に於ける青年團結共働の便利を供へんとを望むもの也) 批評(には、歷史家としての新井白石、我國に宣教師を送るの否を論ず、外山正一君の女子教育書數項を批評せり)

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 325. AUGUST 13th. 1892.

EDITORIAL :--Topics of tho Day.

BYOGRAPHYCAL :--A Good Specimen of the Feudal Lord and Retainer.

NOVEL :—"Natsukusa" (Venus and Adonis) no II.

MISCELLANIES :—Goodby to ones Native Land (Shinobu); My Sorrow for the Country (Moral Deterioration. The Pleasare of working its Reform) Hosunshi; Word pledge and the Conscience (Sangetsushi); for those who go Abroad; A Bird's-eye View of the world;

CRITICAL NOTES.

THE YOUNG PEOPLE :—To the Different young Man's Associations in the Empire.

本號(第三百廿五號)目次

○社說　時事小言二則

○小說　夏草(第二回)無名氏譯

○雜錄　別離(しのぶ)○田舍歎(道德界の零落、矯風上の音樂) 方寸子○言責及吾鏡 (口頭の言と良心の責、我を寫す二大鏡)山月子○洋行の箴一則○天地管見(博愛と熱愛)○禪窟雜感(坐禪修行の初感。閑境叫破の一聲。百魔交々身に迫る。文天祥夢に入る。牧師鍛練足らず。禪僧一夕話)天知子○三日幻境(透谷子)。

○史傳　封建君臣の好標本、白河樂翁公

○批評　明治政史○上代○歷史家としての新井白石○我國に宣教師を送るの否を論ず○武人の虛喝何か有人○外山正一君の女子教育○二つ三つ○尼子義久

○片々　各地の青年に告ぐ○各地青年の運動報告

前週(第三百廿四號)赤表

●社說　家庭は國家なり

●史傳　故安岡いく子の傳(櫻井ちか子)

●雜錄　フルベッキ氏三十三年日本傳道追懷○避暑の教

●家政　母としてのグラッドストン夫人

●兒籃　我宿の花(若松しづ子)

●批評　家族主義女子教育

●寄書　子供と愛國心○コレラ病に付ての注意○文法上女子の解釋

○談緒寸絲

前々週(第三百廿四號)白表

●社說　天地之人

●論說　德川時代の平民的理想(透谷子)

●史傳　裏面の楠公(天知子)

●文藝　其角雜吟三十七句

●雜錄　澤庵禪師を觀る(天知子)○天地管見(六合學人)

●小說　夏草(一回)無名氏譯

●批評　まぼろし(透谷子)○千代田城大奥○日本大辭書○月露○活ける基督と四福音○安心立命○婦人教育雜誌

●片々

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百廿五號 明治二十五年八月十三日發兌

社說

時事小言

冬天亦太陽輝く

第二伊藤內閣は壯觀を呈せり。殊に井上伯が內務に於ける、陸奥氏が外務に於けるは、尤とも人目を快ちよくす。數年來の少年內閣去就變轉の定まりなきに厭き果て、白雲を睨みて失望嗟嘆したる愛國の人は、兎に角熱腦に淸風一拂を得たる心地せり。然れども、條約改正、及び、干涉善後の二つの事業は、前途幾多の騷ぎを閣內に引起すことなからんか。知者にあらずとも之を察することを得べし、此時に當りて、山縣伯と國民協會とは、現內閣に於ける伏魔殿なり、妖雲屢ば之より起らん、而して後藤伯及び河野氏は、一種の導火となることあるべし。吾黨現內閣の爲に太はだ之を危ぶむ。夫れ、人の結合の前途に永續す可きや否やは、其最初に結合せし事情を看て之を察することを得べし。現內閣員は、其政治上の人品に於て果して能く相ひ投合する所ろあるか。今回の內閣組織は、果して此の投合の結果なりとするか。何ものゝ幼稚ぞ斷じて之を然りと云はん。左れば、現內閣が好く網羅して壯觀を綴り成せるは、たま〱以て異日の破綻を生ずる種なれ。吾黨は未だ容易すく謳歌すること能はず。

願くは梅舊を傷らじ

現內閣と民黨との交涉前途何如ん。特に民黨中の自由黨、取分け、自由黨中の河野派との關係そも〱何如んか變ずる。大隈伯、早稻田に橫臥し、意氣ます〱豪壯なりと云ふべし、榎本子は隱れ、佐野子は追はれ、副島伯は彼の壯觀舞台に誘わるゝことなかりき、大隈伯はよし緣遠しと云ふべき哉。此時に當りて、板垣伯依然元の如く、自由及び改進の兩黨連合疇昔の如くんば、日本政界の行く末倘ほ面白し。願はくは、板垣伯が多情の情を少しく大隈伯に分たしめ、忍刻の人幾分にても和らぎ、多感の人少しく忍ぶに至らんことを。二伯の爲に祈るにあらず、日本政局の進化の爲に祈る。

○白表雜誌が各青年會に對するの精神を片々欄內に看よ

史傳

封建君臣の好標本

白河樂翁公

山下石翁

「白河樂翁公と徳川氏時代」は好き著書にて、世上一般の讀者に、彼君子を紹介したり。われは其尙ほ廣く讀まれんことを希がひて此書を推薦す、有志の人須からく一讀すべし。われは別に吾が思ふ事を述べて、少こしく左に評せんと欲す。

仕へては忠臣たり、治めては賢君たり、襲われては孝子たり育てゝは慈父たり、其學は先聖を崇め、其政は堯舜周公に則とり、文に於ては至誠の華爛熳、武に於ては沈實の勇剛固、着眼空に奔らずして而も卑からず、脩藝細技に涉りて而も局促とせざる、圓滿周密にして、能く君たり臣たり子たり文人たり武夫たり政治家たり風流人たりしは、樂翁公なりとす。翁は圭角なき八面十全の人なり。淺薄ならざる博愛偉大の人なり。其姿は時として衣冠を正し肅然たり、何ものか此の武士に當らん。又時としては瀟洒淡如として清泉の流るゝが如し、何ものか此文人を激せん。其篤朴にして親に仕ふる時、誰か之に平天下の遠識あることを知らん。其至誠にして忠信なるとき、誰か之に偉大政治家の經綸あることを窺はん。翁は限られたる局部の畸人物にあらず、居る處ろに好適すべき完人物なりき。翁は或種の人にあらず、一の人間なりき。左れど、余は、ことに封建君臣の好標本として之を觀察すべし。

君、君たり、臣、臣たり

生れて君たるものは臣の情を知らず、生れて臣たるものは、君の情を知らず。只だ臣たり君たるものにして初めて其情を兼知ることを得。翁は即はち是れ也。佐藤兄弟の墓に詣でゝ、終日其忠を忘るゝと能はず、

君に仕ふ心は同じ心なればいとゞ涙をとゞめかねぬる

なき玉よ物いひおはすものならば同じ心の道語らなん

とよみ、二士の事むねに斷えずと云ふ。嘗て、菊園、桐庭の爲に、名分を爭そひ、忠功を全うして早く勇退高踏するも、みち〳〵君のおほ仁惠を覺えて、日々の旅日記に衷情の感謝をもらす。天下遂に其辭職の理由を知らず。左れど翁は自から記して云く、

たゞびとの言ふ事にてあの人は潔よき人なり我なす所ろ

を盡して時にあはざりしかば仕へ致してけり、又は君の氣色蒙むりけるが、其身に於て耻べき事なければ最と心地よけれなど云ふは忠臣の心盡さゞるなり何て潔よきと思ふ可き……己に我子の爲には愚かなりといはれても吾子智慧ありと云はるゝがうれしきは子を愛する誠なり吾あしきと言れても君よしとこそいはれまほしきは愛君の情なり省りみても我身には耻べき事なし左れば我は屋隅にも耻ぢずと心地よく思ふべき物にはあらず、吾れ誠を盡して仕へ侍れども誠たらざれば君は覺悟し給はず遂に君をして善き名得せしめずと屋隅にむかひても耻思ふ可き事なり少し智高きものははや吾れ潔しと事たり貌に思ふは忠の道知れりとは言侍らじ。

翁すでに臣たる情の誠を知れり、故に亦君たる情の誠をも悉し餘蘊あるとなし。其の醫藥に精わしきは、民の病疾を患ふるが爲めなり。其の食物の製法に綿密なるは民の救荒に備えんが爲めなり。而して、其の民を治むるは至誠にありとし、城府を設けずして胸襟を開くを其訣とす。云く、

ものゝ片はし見しものは、政理は別に術あるやうに覺へ權詐の事なすものを豪傑などといふやうに心得ること淺ましけれ中庸にも只一つ誠の事とき給へるをもよそになし君の喜怒は計りがたきを威としぬるやうに心得、抑揚褒貶刑賞なんども計りがたきを尊とみて君たるものゝ心術かくあるべき事のやうに思ふ輩もあるぞかし、こは皆わが方寸の智術もて左右の臣よりして天下の臣民をも皆欺むき取らんとしたるにて……つゐに終を全くせず、と。

一以て之を貫ぬく

翁が一面に於て賢君たり、又の一面に於て忠臣たるの修養は、其の他の諸面に於て、能く孝子たり、慈父たり、文人なり、武夫たるの修養と、軌を一つにす、蓋し同源より混々として流るゝ所ろの清流なり。

或人、養子となるの心得を問ふに答て、

養子實子とわれより隔てなば人も自から隔つべし養實無差別の一言の外言ふべき事はなし、と。

此心を以て万事に當る、一以て之を貫ぬくの敎は、むかし曾參が唯々として悟る所ろにして、而して翁が亦た躬行實踐する所ろあり、云く、

父子君臣夫婦朋友の間も誠の一を本とせずして、何かあ
る可き、天地も誠の一なり、其の誠をうけ得て生れしは
此の万物なり、万物の靈はこの人なり、誠の外に何のも
のかある可き、私智を以て誠を失ないぬるぞ歎かしけれ、
西行が、何事のおはしますかは知らねども辱なさに涙こ
ぼるゝ。小技末藝に至りても、其妙手の場に至りぬるは皆
此の誠にて、天地にもみち、掌にもかくれぬるぞ尊と
き、よく〳〵工夫鍛練して修行す可き事なり。

至誠鍛練

至誠を骨髓とし、之を以て全身を貫かんとす。而して之を貫くの鍛練は實踐自修にあり。實踐自修は空論にあらずして實行にあり。先賢を斥ぞくるにあらずして之を崇重敬奉するにありとす。故に翁は批評を好まず、亦た講釋を重んぜず一意古人の精神を吸入して之を實踐修練するを要とせり。此故に、佛徒の禪論を嫌ひ、王學の倫理に背き易きを戒しめ、仙家の人事を輕んずるを非とし、謹直篤學にして、深く自ら修むべきとを論ず。

修練の根本は養心にあり、然れども只だ養心に重きを歸して形骸を忘るゝは、未だ人の性情を知らざるものとす。是れ極めて實踐倫理の法たるに似て、而も尙ほ空漠の禪論たるを免かれず。翁すでに之を覺り、所云ろ「形の敎」を以て之を補ふ。形の敎とは禮義の謂なり、猶ほ、武を以て文に補なふが如きか。云く、

躬行心術の事は帋上の論にて今日の所作に及ぶものは少く博學聞達の人は出來ぬれど心術の修行つみし儒は少く心つきたるものはやうやく靜坐觀念の事なんどに心を凝らして心もて心を制せんとは思ふなり、と。

此「形の敎に」於ては、翁深く自修發明する所ろあり。之を說くに當りては、生平の謙讓を敢て忘ると云ふ、多年辛苦の處ろ尤とも聞くべきものあり。然れども、翁は亦た之によりて、心術の修養を后にするにあらず。啻に之を后にせざるのみにあらず頗ぶる之を重んじ、學問の神髓を以て一に此にありとせり。云く、

學問は只だ正心修身治國安民のためなり、今は多く名利の具となれりけり。

今ま學問するもの師に問ふ事あるは皆な帋上の事なり、

劍槍弓砲なんどの術には反つて師に其心術なんど尋ね問ひ信行しぬるもの多きぞかし、學問に於て斯る時は心の動きぬる何如がして動かであるべき、今日斯る事ありしが省み愼しみしかば其事はなさゞりしが、心に其邪念は殘りたりなんどと、心術の事心に引あてゝ問ふものゝ稀なるぞ歎かしけれ、其問おこす師も亦少なし。

其本領根源

仁者に敵なし、至誠は万物を變へて友とす、孔子の曰く、天生德于予、桓魋其如予何、と。翁之を說いて云く、

天德を合ふたる氣象は皆な海内外のへだてなく天地の万物に於けるが如く合ふて離れず左れば此の大正至正の氣にはもろ〱の邪氣摧折感化して皆な正直の氣と化す此に至りては彼の敵なしといひためるにも合しなん、と。

而して、此の至誠を養ふは、生平日常の修練にあり、時に臨みて俄かに至誠ならんとするは、其心すでに誠ならず、誠は心中覺悟の結果なり、之を一日にして速成せんとする時は、多くは至眞ならず、時として僞善に落つ。翁曰く、

君子大人も、こゝはと思ふほどなる大節に至り、露も心ろ動かさで誠立る事はかたき習ひなるを、つね〱我心を欺むきて嘗て養ふ事なく、其時に至りて誠の立べき理なし、よし其時に至りて誠立るにもせよ、心てふものは思ふまじきと思ふ事をも思ひはなたず、忘れんと思ふ事をも忘られず、心のまゝならぬ心をもちて常だに爲し得ざる大義を大節に臨みて心動かず誠立つ可しと安んじ侍る心のうすさ、是にてや其時に至りて誠の出し得ざるはしは推しはかる可し、左れば小事にもせよ平日の事にもせよ人知らぬ我心のうちにも露あざぶかずかの言を巧みにし色を令くする事をば、はたと止め侍らんと念じ思ひ常に義勇を養なひ侍らば大節に臨みても誠は出侍るべし

文華煥發

翁の文學は、此の至誠の根基より開發す。花月草紙を讀みて之に感ぜざる人は、靈性的文學に趣味なき人なり。其形容は超然として脫俗の神韻あり。其思想は温乎たる君子の儒の情あり。其視察は人を愛し自然を愛し天地を重んずるの識あり。余はつねに翁の文學を以て德川氏時代の文學第一流の上乘に置く。皆なこれ翁が本韻より流れ出づる清水なり。

小説

夏草

二回

無名氏譯

さては「キッス」がはづかしう御座んすか。ビナスは猶も吐息を繼ぎ、エヽ其ならばよい思ひ付き。何が偖戀てふもの丶花廷、その廷の客人は相の外には御座んすまい。此草村を闇と見て、その深みでの花「キッス」。あれあの藍色の菫草、よもや爰にこうしたと人にはいひ〻すまいもの。エヽあのよな草じやもの、戀といふ字が解らうかいな。春といふ春まだ早い御身故、そりや無理では御座んせねど、こうした大事の〱其時を、つい空に過しては、花の冥利の盡きた日に、何と申譯が立ちましやうぞ。ホンに美くしう咲いたとて盛りの時にとらぬなら、直にしぼむでは御座んせぬか。もしや妾が無愛想ぢや、馬鹿ぢや不具ぢや皺くちやぢや、邪見ぢや曲りぢや胴聲ぢや、または病身ぢやリユーマチぢや、脊虫ぢやすが目ぢや冷性ぢや、衰弱者ぢやといふたなら、そりや不似合の事故に、考へなさるも無理ないけれど、なんの〱その樣な欠けた所のないものを、何故その樣に嫌ひなさる。たツた一筋の皺でさへ妾の眉上には御座んせぬ。妾の眼は大きうてうつくしうて眞白で、年々春の來るように妾も年々この通り肌柔く軟かに、妾の髓とやらいふものは火のよに炎えて居りまする。このすべ〱とした手の平を御身の手にも觸れたらば、エヽ溶けるよに思ひましようぞ。偖は御存じが御座んすまいか、妾に談話をさしたらば、どのよに上手で御座んしよう。あの鬼女のよに草の上を歩めとあらばちよろ〱と、あの女神のよに砂の上を、髮もおどろに舞ふてとあらば、ひらり〱と足さへも見えずに舞ふて見せましよに。そも戀は火の精靈とかや。炎えては上り〱沈むといふよなものでは御座んせぬ。こうして妾の横はる、この櫻草の土手づたい。その力無い草花が、大樹か何ぞを見るように妾を支へて居りまする。エヽ床しのアドニスへ。戀といふものはこのように輕うて〱ならぬのに、何故御身にはその樣に陰氣なものと見ゆるいの。御身一人の心と顏に迷ひといふ字が書かれうか。御身の右の手の平と御身の左の手の平と。戀てふものがあら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

うかや。世は一人では立ちませぬ。一人で世間が立つならば御身も妾もないものを。あれ見たかあの草花の「ナーキサス」みづからおのれの姿を戀ひ、小河にうつるおのれの影を、「キッス」せんとてつい水屑と、なッたといふではないかいな。思ひやつれたるビナスには、かく繰返すさへもどかしう、片手を握る一雫。はては花の汗しん／＼と總身を絞る眞晝中。影は二人を後にして、その後に沿ふアドニスの駿馬に炎ゆる夏草の香にうたれ／＼、主待顔にアドニスの方のみ眺め居りけるに、思ひは同じアドニスのビナスの爲に引留られ、せん方なくてぞ居たりける。

今アドニスは眼も重く、墨色したる瞳子のうちに閃き渡る不懣の姿。その美しき色さへも、低く垂れたる額に包まれ、ただ頬のほとりに皺寄せて、エヽもう戀は聞くまい／＼。この日の暑くなッたのに、動かずには居られうか。

かくと聞くよりビナスは一時にせき上げ／＼、エヽそのよな若い年をして、そりやあんまりで御座んしよう。よし／＼妾の嘆息に、いざ天人の靈息を吹き、この三伏の暑さをぞ、そよ／＼風に冷さなむ。この妾の髪の毛を、御身の爲の影として、それでも炎ゆるといふならば、妾の涙にその火を消さむあれ／＼天にかゞやく日輪は、たゞ温かいといふのみよ。妾は日輪と御身との間に居れどそのやうに、熱いとは思ひませぬ。まこと妾の身をこがす其火は御身の眼のひかり。もしも妾が人間と是世に生れて來たならば、天の日輪地の日輪、日輪二つの世の中に、生れたことで御座んしよう。エヽあんまりぢや、聞えませぬ。是程迄にいふものを、一ッ返事もなさらぬは、石かいな鐵かいな。エヽたとへ石ぢやとて、雨には迷ふものなるを、さては鐵よりも／＼もそッと堅いものかいな。それでも御身は母樣の生みの子で御座んすかエ。その母樣の生みの子で、戀といふ字が讀めぬとや。エヽ其字が讀めぬ程、悲しいことは御座んすまい。御身の母樣もその樣に、情知らずであッたなら、さぞや御身といふものを、是世に生みはすまいもの。エヽ御身がその樣に、妾を御嫌ひなさるゝは、何たる因果で御座んしよう。妾の何處がその樣に、御氣に入らぬので御座んすエ。何もたんとの所望じやと、いふのではなし唯一度。その「キッス」が欲しいといふに、そりや嫌ぢやとはあんまりな。御身が一度の「キッス」をば、して

下さんすなら妾も一度。きッと御身にいたしましよ。もしや一度で足らぬなら、一度の外に今一度。花の「キッス」のその利息。エヽ命ない畵も同前。情知らずの石同前。さては人では御座んせぬか。よく彩ッた人形か。死で無口な姿繪か。目ばかりきらつく木像か。女の生たものでない、人の樣な物かいな。どこからどこ迄男のようで、御身は男じや御座んせぬ。それでも男といふものは「キッス」が嫌ちやとはいなまいに、と、そのさはやかな口唇に、花の勘忍の袋を解いて、内の思ひは一寸の、胸一ぱいに込み上げ〳〵、わが頰の紅くして眼の白くおぼゆるは、戀の判斷に此方の弱み。さては片手の溜め淚。一時にどッと瀬を切りて、花の水車のはら〳〵〳〵。

今やビナスは彼方此方に首を振ると見る間なく、手を彼方此方に振り動し、今戀人を眺むれば、今は大地をくる〳〵〳〵または横手にアドニスを確乎抱きて行かんとする姿を後へたぢ〳〵〳〵。その百合の優しの指を、一ッ〳〵に組み合せ、やらじ〳〵とあらそひける。

うたてやな、ビナスは氣も昏めりと覺しくて、エヽ爰にこうして眞白な雪のうちに御身をば抱きしからに妾は牧塲、御身は妾の野飼の羊。ハヽア御身は何處の邊がよかろいの。小丘か山に谷河か。小丘に水のないあらば、この朱唇に觸れて見よ。どのよに甘い靈泉が涌いて居るで御座んしよう。たとへ雨降ろが風吹こが、この牧塲には心配ない。大きな巖石に翠色の草原。そのよな牧塲で御座んす故、ホヽ妾の羊となッてわるい事が御座んすまいと、いふを聞くよりアドニスは、嘲る如く微笑て、花のゑくぼの戀の淵、その瀬に沈む狂亂の、ビナスこそあはれなれ。嘲らるゝとも知らずして、此處千金と思ふなる。

いで今ビナスは何をいふらん。いかなる事を爲すやらん。盡くる言葉に情は迫り、兎や角すれば時經ちて、エヽあんまりな、そりや殘酷う御座んしよう。ハヽアハッと泣き沈めば、エヽうるさや〳〵と、花の風情の四人アドニス。ビナスをつき退け〳〵て、おのが駿馬へと走り行く。

さりながら、見よ草村の間より、まだ若けれど天骨森として嫋嫋たる姿やいたくたくましき牝馬を見て取るアドニスの駿馬は耳をうち立て〳〵、聞けば蹄の音高く、ひゝんと一聲嘶

きける。こなたの駿馬はたまりかね　木株に結びし手綱を引切り、牡馬の方へと驅せ行くや、黄雲のかなたこなたに棚引ける天をも破る龍の勢ひ。猛に馳て朔風を喚ぶ、雄姿や大地をくづさん斗り。あるひは遠く嘶きつ、あるひは虚空に飛び揚り。ひゝん／＼とどう／＼。蹄に土塵を蹴立ては、天雷の響なす音凄まじく、今までは自由に馭はれし其黒鐵の轡さへ、砂微塵に嚙碎き、兩耳は突き出で／＼、鬣長く突立て、鼻の穴より吹出す息は鑪鐵の湯氣に異ならず。紫焔を吐ける方眼はその猛氣をぞ示しける。あるひは矯矯として靜に歩武を數へつゝ、あるひは飄飄として遠く驅せ廻り、どう／＼といふアドニスの叱咤さへ、その高慢の耳には入らず。たゞ其火炎の眼にうつろふは戀の牡馬の姿のみなり。かの妙工の丹青を落して畵く筆端に、風雨を興す軍馬をあらはし、造化に逼る晴技に左もたゞふべきものこそは、今この駿馬の凡駒に比べ、雄姿毛骨たぐひなき其風情に似たりけれ。駿馬は彼方を眺めやり、牡馬に向ひて嘶けば、牡馬も是方に嘶き返す、返す聲さへ高慢のすねて見せたる牡馬の意地、張り通すとにはなけれども、言ひ寄る駿馬の戀を蹴り、鼻にあしらふ不挨拶。かくと見るより千里の駒も、世を慣る仙人のすねたる如くしほ／＼と、尾を垂れ影も薄暗かり。牡馬はこれを見て取りつ、しづかに嘶き慰むれば、そのいらだてるも癒えにけり吾馬の狂へる樣に怒れるアドニス、そのしづまれるを是時と馳せ寄りて捕へんとすれば、いたくおのゝきつ／＼、アドニスのみを後にして、牡馬と共にむれ鴉、とぶや彼方の森影に狂ひうせたるこそ、いぢらしけれ。

雜錄

別離

之より別る可しと云ふ瞬間時到る迄で、尙ほ別るゝ心地せず、友情はなか／＼に別離と云ふとを承引ぬ者なる可し。扨ていざ別ると云ふ時、傍なる多くの人、さま／＼に辭を盡して暇乞ひするを聞く、あゝ何んぞ其余裕あるや。われは一言を述べず、たゞ目を以て送る。尙ほ言遺せしと多しと感ずれど、思ひ出さず。滿腔の思ひを一ツだに吐きたしとすれど、形容すべき辭ばを發見せず。行くを止むるは恥かし。涙は滔

えて眼眶の奥に藏れしむ。握手一握。反然身を背け勇を鼓して去らんとす、わが足太はだ重し。友は艦上の欄に憑りて觀る、余は梯を下りて小舟に乘る。一波激動、艦と舟と既に二三段を離る。友は微笑してわれを見る、此際彼が强ひて微笑せるは涙千行よりも苦しかるべし。汝なんぞ斯く泣で自から制するとの强きや。彼は娓々として語ることを好まず、率直淡固にして外見極めて雄々し。其の尤とも冷々たる時は則はち其尤とも熱々たる時あり。われ亦た微笑を以て酬ゆ。されど中間追ひ〳〵に遠ざかる、わが舟進むと何んぞ斯く速やかなるや。

遙かに見る、艦吏出で丶吾友を制するが如く、吾友勃然として其處を去り濶歩横行して室内に入るもの丶如し。あ丶是れ洋人が無禮を憤ふる彼が最初の奮激たるなからんか。彼平生少こしく洋人を斥ぞくるの僻あり、寧しろ之が爲に激すると過度なり、而して今や學術を修めんが爲に吾日本を去る。嗚呼今後の日夜は、彼をして慨泣せしむるもの丶みなるべし。請ふ少こしく其懷ひを緩ふせよ。われ小舟の上に垂首れ、暫らく默禱す。舟人之を知らず、近づきて余を動かし雜談をはじむ。

既にして余が宿に歸る、家は海面に向つて眺望す。大艦すでに去り、煙遠く失せ、細小の舟言ひ譯顔に五々三々として碁布す。

十六日にして四千海里の外にあり、然らば一日にして幾干、と算へんとす、算法明らかなれども何ゆえぞ其數を見出すと太はだ難し。

今日一日にして何處まで行くらんと想像す。吾日本が最後に一髪の線の如く見ゆる時あるべしと言ひたる其時は、何時ごろならんかと想像す。

出發の壯意稍や沈まり、父母の國漸やく影を薄くし、寂寥と云へる心地彷彿として汝を取圍まんとする最初の時機に之を開くべし、とて與へたる別離を慰さむる余が文章は、大抵、何時ごろに開封さるべきやと想像す。

昨夜、月、浮雲の間に出沒し、横濱公園の松、地の上に姿を畵き又消す、玆に漫歩して行末、來し方を打語らふ時、彼は言へり、何人に別る丶も別る丶は悲しと思ふのみなり、されど吾母に別る丶の情は悲しきよりは更に悲しと。此は當

然の情と外に多くの事由あるが故なるべし。余が心地すでに斯の如し、彼母なる人の懐ひ何如ん、彼が今ま母を懐ふの苦心何如んと察す。

昨夜談緒斷えず、遂に曉に徹す。今ま余は睡むしと云ふにあらねど、暫し眠つて忘れんと欲す。時に一生來りて彼が言傳を語り、必らず寢ね玉へと告ぐ。其言に云く、彼の人の言傳の候、昨終夜寢ろひ玉はず、今日尊躰に害せんとを深く憂ひとす、是非とも安眠し玉へと。余問ふ、何の暇にか彼れ斯の如き言を御身に托したりや。一生答ふ、車に乗りて宿を出で將に波止場に走らんとする中間に於て、と。余言はず、點頭づきて蓐に入り、強いて目を閉づ。

余問ふ、此事件に對する汝が意見何如にと。彼、例の如く眉を一蹙し、眞率鬱勃、短少の激語を發して答ふ、索々要緊を刺すもの丶如し。彼、亦た問ふ所あらんとす、余も亦た言はんと欲す。夢破れたり。

御身が洋行は人の品徳を養ふが為なり、一言するに更にクリスチアンとなるが為め也、あつぱれ堪能の學者技手となりて歸朝し玉ふとも御身が品徳にして今より進まずば御身は父母の產を妄りに費やし、天父の日時を徒らに過し………以下言語を忘れ、煩悶して思ふ。こは夢中送別の吾文を復誦せしにてありき。

故あり家人來りて余を起す、余危坐して答ふ、甚はだ落付かぬゆへに尙暫らく休まんと。此聲朦朧として耳に殘る、家人笑つて聞たる樣姿髣髴として目にあり。后に思ふ、之も亦た夢中の事なりき。

何故と知らず、俄然眼覺めたり。出で丶稚兒等が遊ぶを見、又家人の語らふを聞く、懊腦として心判然せず、机に向つて筆を役し、鬱結を漏さんとす。

數葉に書列ね、后にて見れば、則はち以上の文となれり。

夜、滿月中天に懸る、雲霽れ、錦波長安道を織成す。余、兒を負ひ濱砂を踏み波打ぎはに佇立す、三生伴なふ。一舟影黑く錦波の上に横たはり、觀音崎の燈台幽かに光を放つ。想ふに、彼の人、今や大洋茫々の中に同もに此月を觀るや何如に、白波激搖して我が足下を洗ふにつけ、今夜海洋に大濤あらずやと掛念す。彼の人能く甲版の上に遊觀するに堪ゆるや。實に彼は今ま巨洋を横ぎりて外邦に入るの人なりけり。万感潮

の湧くよりよ急、たゞ肅默として沈思す。背にしたる兒之を知らず、波に驚ろきて危々と云ひ、彼方を指ざす。其の命のまゝに去つて彼方に歩むとき、後方に三生が歌ふ歌きこゆ、

主によりてぞ　　いつくしめる
とものゝまじらひは　　とはにたえじ
ちゝのまへに　　ともにいのり
おなじきのぞみと　　おそれをもたん

田舍嘆

在故山　カ　寸　子

○道德界の零落

田舍道念の墮落何ぞ夫れ甚だしき。家庭に於て純潔を見出す能はず、學會に於て純潔を見出す能はざる也。これ近時小學兒女の無罪の遊戲をつくぐ\と眺めて、慄焉として愕嘆したり。彼ら無罪の子女、齡十四五小學を卒へて出づるの後、姦淫の罪を犯さゞる者幾人かあるぞ。未婚の女子に於て處女を見出す能はず、况んや處男をや。言ふに忍びず田舍道德の内情推して知るべき也。

昔しエレミヤ哀歌を謠ふて曰く。あゝ哀しいかな、古昔は人のみちぐ\たりし此の都邑、いまは寒しき樣にて坐し、寡婦の如くになれり、嗟もろぐ\の民の中にて大いなりし者、もろぐ\の州の中に女王たりしもの、今はかへつて貢をいるゝ者となりぬ、彼れよもすがら痛く泣きかなしみて涙面にながる、その戀人の中にはこれを慰むるものひとりだになく、その朋はこれに背きてその仇となれりと。嗚呼悠々たる幾千載の下、田舍の道德界を憶ひ念ふて、一唱三嘆の暗涙に咽ばずんばあらず。

○矯風上の音樂

田舍の一奇觀は、如何なる茅屋と雖も、所謂貧乏德利を所有し居るとこれ也。われ淫樂の罪あるを語り、禁酒の必要を說きしに、彼等の多くは斷然禁酒して品行を謹まんと決心したり。

責る勿れ野人の不潔不德なるを。彼等豈に淫樂の罪なるを知らざらん、飲酒の有害を認めざらん、只夫れ知りて悛むる能はず、認めて猶ほ禁ずる能はざる所以のものは、實に他に何等の樂みを有せざれば也。彼等役々として働く、働きて僅か

に糊口を凌ぐ、斯くて人生五十年の行旅何の樂みかある。是に於てか彼等は酒色の淫樂に耽りて、エピキユリアンの墮落に入る也。田舍茅屋の至る所、貧乏德利を唯一の娛樂となすわれ今にして却て其憫むべきを知りたる也。故に彼等の矯風改革を企圖せんと欲せば、其の淫樂を棄てしむると同時に、純潔なる娛樂を與へざる可らざる也。心靈上に於てのみならず、將た又肉躰上に於ても。

アルビンク嘗て英國に遊び、一度は大倫敦の繁忙々の狀に驚き、轉じて其府中安息日に會堂に詣りて嘆賞すらく。須臾にして堂內靜まり、瀏亮たる奏樂の聲聞え、群衆の心を擊つと無量なり、餘音嫋々宛轉として空焉たる天井を繞り、迴かなる廊下の一隅に落ちもあへず、再び轉じて歌媛の妙音に反響する也、余は告白す、まだ嘗て斯る聖樂の如くに感化力の微妙なるを感ぜしとなし、喩へばこれ傷める葦の如くに破碎したる心をして、凱歌に導かれつゝ昇天せしむるの念あれば也と。われはアーピンクの敍事を通ふして、倫敦府中安息日の光景を羨望すると同時に、音樂が如何に俗人の心の上に天使的の權威と妙力とを有するかを愕かずんばあらず。而してわれ少しく田舍に矯風改革の事業を試むるに及んでは、音樂に對して新たなる必要と注意とを發見し、今や憫むべき此同胞を善導矯化すると最も容易に最も有効なる一方法は、實に音樂上の感應力を用ゆるとありと確信し來りぬ。聞く惡鬼サウルに臨みし時、ダビデ琴を執つて彈けば、サウル慰みて愈え惡鬼かれを離れたりと。警告す吾黨の姉妹、實に音樂を知ざる可らず。

言責及吾鏡

山月子

(上)　口頭の言と眞心の責

愛を語らば宜しく愛あるべし、義を說かば宜しく義あるべし清潔を論じ、嚴肅を言ふ、其人必ず清潔、嚴肅ならざるべからず、一の言語、一の文章、必ず眞心に責あるべし、僞善虛飾、妄言空論する者多き際、傳道者、敎育者、改革家たる者宜しく自己の一言、泰山より重かるべし、『大丈夫一言既に出れば駟馬も及び難し』今日語る所、今日若し及ばず能はずとするも、他日必ず之を遂ぐるの覺悟を有し、今言ふ所、今の境遇にして行ふべからずとするも、若し他の境に移さは必ず

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

之を爲すべしとの確信を持ち、而して之を言語に發すべし、既に發せば、身を以て之に保證するの慨あるべし、吾等は彼の空しく輕々しく饒舌するの徒を厭ふと久し。

（下）我を寫す二大鏡

我が容貌を寫し、我が態度を寫すの鏡は、人よく之を知る、されど『我』を寫すの鏡は、之を知らざる者なきに非るべし余は今謹みて之を諸君に示さん、

第一は、聖書に對し、古今の人物に對し、天地に對するとなり、之に對して『我』の美醜を照し觀るべし、

第二は、人に對し、家に對し、社會に對するとなり、之に對して『我』の働きの如何なる結果を生ずるやを觀るべし、

之を約めて言へば、神と人とに對して、嚴かに、明かに、『我』を寫すとなり、余は私かに以爲く、是れ『我』を寫すの二大鏡なりと。

洋行の箴一則

近日留學の爲め洋行せる女生に種々の所感を記して送ろ。其中左の一節は讀者の警覺を請ひたしと思ふ節ありて掲載せしむ。

洋行歸朝者を見るに十中八九の人は大抵同じき誤に陷いる即はち黄金を崇め世の交を重んじ榮華を頼みとする事一言するに靈性的を離るると多く世俗的に近づきて進むの事例これ也余甞て此理を考へて一の戒を得たり御身に贐にせん。

夫れ基督教は圓滿の宗教なり其崇むる神は天地を支配す天地とはあらゆる宇宙六合の義にして之に過去現世及未來を含むとは論なし即はち基督教の神は去來今の三界を均しく治め玉ふ此三界は皆な神の國なり神は決して過去のエデンにのみ現はれ玉はず又未來の想像の天國にのみ住み玉はず實に今の現世にも住み玉ひ何處にも其御心の行はれてある也左れば基督教は現世を輕んずるとなし何んとなれば現世も亦神の世なりと思へば也此故に基督教の眞の人は現世の所有物を輕んずるとなし富も地位も此身躰の肉も皆正當有益なる所有物と思ふ所云る靈を重ずるが故を以て此等現世の品を空とするとなしされば經濟學は基督教國に起りたり紳士貴女のヲノアと云へるものも身躰を重んずる身理衞生の道も亦基督教國に於て盛んとなりぬ基督教は富を生み壯健を生み此世のホームを産み十九世紀の物質文明をも生みたり此即基督教が靈を重んずると共に肉を棄てず來世を慕ふと共に現世を果敢なしと觀ぜ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ざる所以の理なり基督敎の圓滿なる所以こゝに存す基督敎徒が佛僧の如く未來をのみ賴とせず孔弟の如く過去をのみ慕はず三界に達觀して正に其本地を覺了し洪然として天地の人たる所以のもの亦此に存す。

然れども基督敎が右正當の面目に達したる迄には一度び矯激の界に至り嘗て厭世の趣を好しとはしたり當時熱信の敎徒たるものは心を纏め骨に刻み一切の世事を空なりとして思を只管ら未來の靈の世にのみ注ぎ之を以て高德なりとせり此の極端なる誤謬を一度び經過して而して後ち眞の面目に反りたり。

一個の信徒の經驗に徹するも亦然り初は俗人なり次は禪僧なり最後にクリスチアンとなる俗人は此世に沒し禪僧は全く此世を離る然れどもクリスチアンは此世及彼世の二に跨る蓋しクリスチアンには此世及彼世の區別あることなし世は一也死は眠也此世にある限り肉を衣、彼世に移るとき之を脫ぐ左れど必ずも此衣を輕んぜざるは季節によりて衣を更ゆるとき必ずしも前衣を輕んぜざると異ならず。

然るに我國の信徒は多年佛敎文學の感化を蒙り靈と肉とを區別するの想一層銳敏なり此に於てか基督敎を信じ靈を重んじて肉の事を棄つと云ふと同時に世事一切を果敢なしと觀じて富も健康も悉とく空なりと辨まふるもの多し故に斯敎に熱心なるには全く世事を棄るにありと誤解し衞生に注意し富を殖やすことに心を掛るは殆んど宗敎心に反對するものゝ如く感ずる人多し所云る熱信の徒に於て特に此弊あり此の弊や殊勝なる弊あり然れども到底弊たるを免かる可らず。

人健康ならざれば働らくことを得可らず働らかざれば人を益しがたきのみか遂に人の厄介となる可し亦た健康ならずんば心情鬱悒として天地の美を感ぜず日光の下に暗夜を慕ひ光明の裏に爽快の心地なきことあり歎ぜざる可らず又富は大ひなる力なり富は多くの善を爲すことを得べし富あらば救濟の過半を爲すことを得べし富は決して惡しきものに非ず富を用ゆる人の心屢ば惡しきのみ富は決して輕んず可らず。

故に富及健康其他人世の樂事益事を産する所のもの決して猥りに斥く可らず此等のもの亦現世に於けるの重寶なり。

日本の基督敎は初代にして倘厭世の趣味を混ず而して熱心なる人ほど實に厭世の氣味あり之れ今に於て免れがたきことなれ

ど十數年の後は必らず一新すべし然るに歐米諸國の基督敎は既に此の一時代を經過したり。

歐米の宗敎家中にも固より異なると假りなるとある可し然れ共要するに彼等は世を厭ふと掛なし彼等は既に厭世的基督敎の境界を經過したり而て彼等は世事を其當に重んず可き度合に於て重んず之を暴りに斥けざる也（但し亦暴りに重んぜざる也）。

此の當に重んず可き度合に於て重んずと云ふの一理尤とも注意す可し世上の富、華、及壯健は何れも夫自身に於て惡性のものに非ず此等皆な人間世に在る時代の間（即ち人の一生の一部分）の重寶なり須からく之を人世に於ける間の重寶とす可し決して輕んず可きに非ざる也されど此等は皆世に在る間の重寶たるに止まり永遠の寶たるにわらざるとを思はざる可らず一度び死の界を超ゆる時は此等皆な空に歸す例せば日本の紙幣海を超ゆると共に價なきに均し然れども海を超へて價なきが故に海の此方に於て亦價なしと云ふとなかれ死以後に價なきものは現世に於ても空なるには非ず達人は此理を透觀し能く其重んず可き度合に於て重んず。

人の一生は死を以て畢るものに非ず故に其着想は死以後にも及ぶ可し然るにたゞ現世に執着して塵の世の寶をのみ頼みとするは實に可憫の識見たり黄金を最上の力とし壯健を無限の賴所とするは朝の露を繋いで飾の珠とし夕の霞を色として錦を着し一時の蜃氣樓に入りて長久に住わんとするに同じ。

故に人は物外に超然として靈界に逍遙遊し邦土山川の外に氣息し所云る天地の人となりて六合宇宙に悠々乎として樂しむ可し此識見を有して而してのち人世の万事に接し其重寶を懷にせば必しも暴りに之を斥けずして而して之に迷ふとなし之を其當然の分に於て利用するとを得之を君子は器ならずと云ふ。

歐米の基督敎は此趣を悟り深く靈性を重んずると共に亦た人世の榮華を棄てず此に於てか黄金燦めき躰育の遊壯んに交際世辭の術甚はだ巧み也此地に留りて此等表現の象を見るものは更に其裏面を透觀し物質開化の底に幽深靈潔の文明同く存する邊に着眼せざる可らず此着眼なきものはたゞ外相に眩して乍ち化せらる滔々たる浮萍末流の洋行者は大率ね此渦に

染む。
御身此一事を深く記念し巍峨たる大廈高樓も疾風雷電の如き飛車走船も日夜轆々回轉する万千の器械も巧妙利便を極めたる精細至極の諸の機關も皆均しく富の結果也と語り而して富は錢によりて代表せらる錢の德偉大なりと感じたる時は更に一鼓して其奧に靈界の刺激物あることを忘れ玉ふなかれ銀光不夜城に輝り百花霜雪の内に笑ひ美人才子と遊び音樂天の樂みを寫し四方の榮華一堂に集り人は皆な媚と笑と愉快と悅樂とに埋もるの交際を目擊し哲學者も好く談じ大說敎家も能く笑ひ眞面目の人皆な滑稽に長じ上流人皆な世辭の内に漂よい泳ぐの景况を視察しあゝ人は亦此交際なかる可らず人世亦此壯遊を欠く可らずと感じたる時は更に一呼吸して其底に倘學ぶ可きの道あることを記憶し玉へ嗚呼永遠の生命なき人安んぞ談笑に眞樂するを得ん靈性の信仰なき國家に何んぞ久しく爽快の交情あるを得ん御身更に其裏面を見よ。
然れ共世何處にか眞の輕薄者なからん想ふに彼地や寧ろ之に多からんとす御身實に之を確認せば去つて眞正のホームに入り至誠の人物に交はる可し彼地此等なしと云ふものあらば未其眞相を知らざる也御身もし眞に覔めなば必ず其家と其人とあらん御身之を採りて之に交はらば學理を發見したるより益ある可し學理は死物也人は生く其家は生命の宿り也。

天地管見

六合學人

(九) 博愛と熱愛

博愛と熱愛との調和何如にと題して問ひたるに、前の團結の事を答せしと同じき女生亦左の如く論ず。同じく余が心を得たるものなれば、收め置く、

博愛と云はゞ、凡ての事眞理を標準として正義に對し、强きは之と伴ひ共力し、弱きは之をあわれみ保護し能く其足らざるを補ひ、衷心人を愛するといへる博き心もて、時と場合、國と人との差別無く、眞理の道に伴ひ進まんとするものなり。熱愛に於ては稍や異なる所あり、博愛と云へる意は强ちに之に加ふること能はず、一のものに於ては如何に熱なりと雖も、一方に於て不熱なることあり、蓋し博愛に於ける如く愛を博く普くすると云ふことは斷言し得られざるべし、之に反し博愛に於ては、又如何に愛普きとも、若し之

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

が熱切なる衷心よりして起りしにあらずんば、到底博愛とは云ひ難し、又愛と云ふの言語、絶對の文字なるに於ては眞の愛の中に既に熱及び博の字の自らに存するものあり、たゞ實際の塲合に於ては、此眞正の意味の愛は理想のみにして行はれず、從て博或は熱の字を冠するの止を得ざるに至れるは悲むべきとなり。到底物に熱心なきものは正義薄し正義の念薄きときは從て公平普及と云ふとなし。故に曰く博愛には熱愛必ず調和すべく、又熱愛なくんば博愛たると能はず、然れとも單に熱愛と云ひて熱愛は即ち博愛なりと云ひ難し。蓋し熱愛は博愛の一性質と謂ふべし。

禪窟雜感

天笳子

坐禪修行の初感

切に人の靈を愛し、世の裏面を味ふと深きに隨ひ、又人に感じ世に激するもの多く、次で天職の輕からざるを惶み、自己の鍛錬疎かなるに戰く、沈思默考、肉を縛し心を壓し汎濫、溢流する情緒を叱して意志の強健を鍛へ、人智を殺して天智を湧發し、道を誦せずして道を行ぜんとす、多年武道に於て稍や之れを開悟する所あり、基督敎に於て多年之れを推察する所あり、然れども尙ほ禪に於て之れを確かめんとすると久し、此頃激感交々來りて腦漿常ならず、昏倒痛激するもの再び、終に飄然去て風清く山靜かなる禪寺に寂居す。

世事に遠ざかりて成る可く面晤を謝絶し、一意專念、朝より夕まで獨り兀坐して結跏趺坐の行に篭り、三昧の室に餘念なく、寂寥の境遇に屢〻茫然たるを激勵し、罵りては地を蹈鳴し悲みては心に鞭撻す、思ひ屈して更に勵む、逆境の鍛錬何れの時にか苦を脱せん、何れの時にか樂を觀ん。

閑境叫破の一聲

有名なる古刹建長寺の最も奧まりたる所、堂廣く樹木深く、氣息なき人兀々と死坐すれども、血ある人又あるなし、唯膳を運ぶ若僧と隱坐せる老和尙とあるのみ、禪室関然として山高きを眺む、孳々たる蟬の聲、戞々たる蜩の聲も絶へて、炎熱草木を凋まし、微風鬢をも動かさゞるの時、人を想ふて胸中淋し、眸を凝して庭石に人世の囁きを觀ずる間一髮、老ひ鶯一聲高く鳴きて寂耳破れ、叫破の一聲餘韻止みたる所、俗腸一掃實に悟道の感味潛む。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

百魔交々身に迫る

道貫大和尚余に先づ公案を授く、曰く昔し一僧あり趙州なる人に問へらく狗子に還て佛性ありや無きやと、趙州云へらく無と、二六時中此無字を看せよ、晝參夜參、心々相顧み猛に精彩を着て無字を守れと。余諾して此公案を工夫す、膽を張り氣を鋭にし、端坐して脊梁を直にし、呼吸を鎭めて心を虚にせんとす、世事百感先づ勃々として交々起り、動もすれば公案を奪ひ去る、庭樹の根枝、庭石の片蔭、席上坐下、身邊屋隅、朦々として妖魔邪鬼遮り來る、眼を開きて叱咤すれば冷笑し苦笑し果ては嘲弄して苦しましむ、祈禱瞑目一念すれば、百魔忽然と消へて人多く現はる、妄像滅了して煩悩更に來る、人無き所却て人多くを觀る、談らふ者無くして却て胸の談らひ多し、愛想を悟了したる、クリステアンが、冷悟せんとする禪行に於て、最も苦しきは此境なるべしや、忘れんとせば尚生憎に忘れ得ず、意志を喚起して勇猛に愛着の情を壓殺し去らんとすれば、愈々激憤して終には悲哀と成り、勞れて僅かに死灰の躰に入らんとすれば、睡魔魅入て殆んど行者を喰はんとす、斯くすると屢々、辛うじて公案を探れば茫として捉ふる所なし、二日にして稍一考を得、三日にして又再考を得たり、欣然として之れを提出すれば老和尚一喝して退け、有無の無に非ず、虚無の無に非ずといふ、更に提出すれば又退けらる、脳熱して岑々と痛く、拳を握りて昏々と疲る、奮然と立て禪書に眼を曝し、悵然と退きて禪僧に問答す、禪病發して狂する者往々あるも宜なり、蟬の聲、風の音も未だ耳に遮りて無我の境に入るさへ難し、嗚呼茫々草を撥き去て追尋す、水濶く山遙かに路更に深し、力盡き神疲れて覓るに所なし、但聞く楓樹晩蟬の吟ずるを。

文天祥夢に入る

余文天祥指南錄を愛讀すると久し、參禪するの前一夜、其抜萃を繙きて左の句を吟誦すると數回、

悠々天地濶し、世事誰と論ぜん、清夜爲めに涕を揮ふ、
白雲空く斷魂、死生は蘇子の節、貴賤は翟公の門、
前輩瓶の如く戒む、無言は有言に勝る、

天祥潜行するの途、睢陽郡の常州を過ぐ、北兵殘暴して忠良の士女を盡く殺戮せる跡を想ひ、痛哭して凄然たる一詩を吟ず、曰く

山河千里在り、煙火一家無し、壯甚なり睢陽の守り、寃なるかな馬邑屠、蒼天如し問ふべくば、赤子果して何の辜ぞ、脣齒提封田、膺を撫でゝ三漢吁。

忠烈の心、仁愛憤激の情を迸らす、彼れ又更に楊子江を渡りて其强健不拔の丈夫膽を吐く、余益々此好漢を愛慕せり、其詩に曰く

幾日か夙に隨ふ北海の遊、回て楊子大江頭よりす、臣の心一片鉄　針　石、南方を指ずんば肯て休まず。

余此三詩を吟じ枕を叩て臥す、果して其夜異裝の丈夫夢に入る、手を握て散步す、覺めて一層激勵せられ、愛を埋沒して禪窟に入る。

牧師鍛鍊足らず

言語を以て耳に傳へ、文學を以て目に傳ふ、智識を擴開するのとこれにて頗る可なり、然れども道を修せんとするもの唯之れを見聞するのみにて得べきや、見聞せるものを材料として自修鍛鍊し、肉を打ち心を苦しめて自己のものとし、而して悟道するに非ずんば不可なり、今日を見よ、學問は耳目の技術と成り、修道も博覽强記を以て獲たりとせんとす、巧みに長舌を掉ひ、巧みに法策を案ず、而して行はざるを恥とせず、行ひ得ざるを憾みとせず、倘巧舌を弄して行ひ得ざるを辨解す、余は書籍の人に飽き果たり、余は巧舌非行の世に倦み果てたり、何ぞ況んや道を行ずる者をや。

古來禪僧の道を行ずる者實に身命を拋つ、教えらるゝに非ず自ら刻苦して鍊磨するなり、其鍛鍊の狀爰に述べず、疑ふらくは禪關策進一卷を閱讀せよ、自ら激勵するものあらん、基督敎の牧師安んず可き時に非ず、若し心中常に謙遜して自己の足らざるを惶み、安眠惰睡するに非ずんば可なり、若し輕からざる牧師號に顧みず、鼻動かして衣食の甘きに安んじ、半錢人物を壇上に披露して弟子の足を洗ふの謹直温頁なく、神の言葉を賣却して幇間賤商の相を現はし、沈痛熱愛の肪腑より出るの言と、德を包むの無言人物とを修得せんとするとなく、恬として一世を安く暮し往かんとせば、汝等こそ實に禍なるかな、汝等一人の猛省は幾百崇拜者の活命ならずや最高最大の道も傳ふる者自ら鍊らずんば末路知るべきのみ、禪餘腦中の一塵端なく發して爰に至る。

禪僧一夕話

一問を試みて曰く宇宙最大のもの何ぞや、禪僧言へらく、心なり、心の他に物なし、世界は心の上に浮ぶ一粒の芥子のみ余又問ふ、非是佛、非是物、非是心とは何ぞ、彼れ曰く、佛の他に物なく心の他に佛なし、草木も亦佛性あり、余曰く王陽明は草木も心ありといふ、余其一心論の今日敗滅したるを知る、然るに禪家有情非情の差別なく彼彼無差別なりといふ如何、僧曰く、先づ主觀的に萬象を觀、然る後客觀的に之れを分つて物とし心とす、所在萬理に適合せざるものなし、倘禪學に深入せば趣味自ら深かるべし、余曰く基督の道又汝に談らん、共に主義を鬪はせば妙ならんか、終に諾し去る、日々に閑話なりしも概ね此類多し、

三日幻境（上）

透谷子

人生何すれぞ常に忙促たる、半生の過夢算ふるに遑なし。悲しいかな我も亦た浮萍を追ひ迷雲を尋ねてこの夕徒らに往事を追懷するの身となれり。

常に惟ふ志を言ひ志を行はんとするものは必らずしも終生を勞役するに及ばず。詩壇の正直男（ゴールドスミス）この情を賦して言へることあり。

I still had hopes, my long vexation past
Here to return——and die at home at last.

浮世に背き微志を蓄へてより世路酷だ峭嶢烈々たる炎暑凄々たる冬日いつはつべしとも知らぬ旅路の空をうち眺めて屢く正直男と共に故鄕なつかしく袖を涙にひぢしことあり。

われは函嶺の東、山水の威靈少なからぬところに產れたれば我が故鄕はと問はゞそこと答ふるに躊躇はねども、往時の產業は破れ知己親緣の風流雲散せざるはなく、快く疇昔を語るべき古老の存するなし。山水もはた昔時に異なりて豪族の擅横をつらにくしとも思ずうなじを垂るゝは極石に名山大川の威靈も半死せしやと覺て面白からず。「追懷」のみは其地を我故鄕となづけど「希望」は我に他の故鄕を强ゆる如し。

回顧すれば七歲のむかし我が早稻田にありし頃我を迷はせし一幻境ありけり。輕々しくも夙少くして政海の知己を得つ、交りを當年の健兒に結びて鬱勃沈憂のあまり月を弄し花を折り、遂には書を抛げ筆を投じて、一二の同盟と共に世塵を避けて一切物外の人とならんと企てき。今にして思へば政海の波涙は自から高く自から卑く虛名を貪り俗情に蹤はるゝの人に

は棹を役ひ櫂を用ゆるのおもしろみあるべきも、わが如く一片の頑骨に動止を制し能はざるもの丶漂ふべきところならず然れども我は實にこの波浪に漂蕩して悲憤慷慨の壯士と共に我が血涙を絞りたりしなり。醜惡なる社界を罵蹴して一蹶青山に入り怪しげなる草廬を結びて、空しく俗骨をして時人の名に敬して心には遠けしめたるなり。この時に我が爲めにこの幻境を備へ、わが爲にこの幻境の同住をなせしものは相州の一孤客大矢蒼海なり。

はじめてこの幻境に入りし時蒼海は一田家に寄寓せり、再び往きし時に彼は一畸人の家に寓せり、我を駐めて共に居らしめ我を醉はしむるに濁酒あり我を歌はしむるに破琴あり、縱に我を泣かしめ、縱に我を笑はしめ、我素性を枉げしめず我をして、我疎狂を知るは獨り彼のみとの歎を發せしめぬ。おもむろに庭樹を瞰めて奇句を吐かんとするものは此家の老畸人、劔を撫し時事を慨ふるものは蒼海、天を仰ぎ流星を數ふるものは我れ、この三個一室に同臥同起して玉兎幾度か缺け幾度か滿ちし。

三たび我が行きし時に蒼海は幾多の少年壯士を率ひて朝鮮の擧に與らんとし、老畸人も亦た各國の點取に雷名を轟かしたる秀逸の吟咏を廢して自村の興廢に關るべき大事に眉をひそむるを見たり。この時に至りて我は既に政界の醜狀を惡くむの念漸く專らにして利劔を把つて義友と事を共にするの志よりも靜かに白雲を趁ふて千峯万峯を攀づるの談興に耽るの思望大なりければ、義友を失ふの悲しみは胸に餘りしかども私かに我が去就を紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ。この第三回の行われは髮を剃り笻を曳きて古人の跡を蹈み、自から意向を定めてありしかば義友も遂に我に迫らず、遂に大坂の義獄に與らざりしも、我が懷疑の所見朋友を失ひしによりて大に增進しこの後幾多の苦獄を經歷したるは又た是非もなし。

狂ひに狂ひし頑癖も稍靜まりて玆年人間生涯の五合目の中阪にたゆたひつ丶、そゞろに舊事を追想し、歸心矢の如しと言ひたげなるこの幻境に再遊の心はこの春松島に遊びし時より衷裡を離れず。幸にして大阪の事ありてより消息絕へて久しき蒼海も獄を出でゝ近里に棲めば書を飛ばして三個同遊せんとを慫むるに來月まで待つべしとの來書なり。我は一日を

千秋と數へて今日まで待ちつるものを今更に閑暇を得ながら行くべきところに行かぬはあさはかな心の虫の焦つを抑へかねて、一書を急飛し飄然家を出でゝ彼幻境に向ひたるは去月二十七日。

この境都を距ること遠からず、むかし行きたる時には幾度か鞋の紐をゆひほどきしけるが今は滊笛一聲新宿を發して名にしあふ玉川の砧の音も耳には入らで、施人の行きなやむてふ小佛の峯に近きところより右に折れて、數里の山徑もむかしにあらで腕車のかけ聲すさまじく、月のなき桑野原、七年の夢を現にくりかへして幻境に着きたる頃は夜も既に十時と聞きて驚ろきたり。この幻境の名は川口村字森下、訪ふ人あらば俳號龍子と尋ねて我か老畸人を音づれよかし。

龍子は當年六十五歲、元と豪族に生れしが、少うして各地に飄遊し、好むところに從ひて義太夫語りとなり、江都に數多き太夫の中にも寄席に出でゝは常に二枚目を語りしとぞ。然れども彼は元來一個の俠骨男子、藝人の卑下なる根性を有たぬが自慢なればあたらしき才藝を自ら埋沒して中年家に歸り父祖の產を繼ぎたりしかど、生得の奇骨は鋤犁に用ゆべきにあらず、再三再四家を出でゝ豪俠を以て自から任じ、業は學ばずして頭領株の一人となり、墨つぼ取つては其道の達人を驚かしめ、風流の遊場に立ちては幾多の佳人を惱殺して今に懺悔の種を殘し、或時は劍を挺して武人の暴橫に當り、危道を蹈み死地に陷りしこと數を知らず。然れども我が知りてよりの彼は沈靜なる硬漢、風流なる田人、園藝をわきまへ、俳道に明らかに、義太夫の節に巧みに、刀劍の鑑定にぬきんで、村內の葛藤を調理するに威權ある二十貫男、むかし三段目の角力を惱ませし腕力たしかに見へたり。

わが幻境は彼あるによりて幻境なりしなり。わが再遊を試みたるも寔に彼を見んが爲なりしなり。我性尤も俠骨を愛す而して今日の社界まことの俠骨を容るゝの地なくして剽輕なる壯士のみ時を得顏に跳躍せり。昨日の一壯士奇運に遭會し代議士の榮譽を荷ひて議塲に登るや、酒肉足りて髀下見苦しく肥ゆるもの多し、われは此輩に會ふ每に嘔吐を催ふすの感あり。世に知られず人に重んぜられざるも胸中に萬里の風月を蓄へ綽々餘生を養ふ、この老俠骨に會はんとする我が得意はいかばかりなりしぞ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

車を下り閉せし雨戸を叩かんとするに、むかしながらの老婆の聲はしはぶきと共に耳朶をうちぬ。次いで少婦の高聲を聞きぬ。わが手は戸に觸れて音なふ聲と共に、中には早や珍客の來遊におどろける言葉を洩らせるものあり。わが音むかしに變らぬか、なつかしきものは往日の知音なり。戸は開かれて我は迎へ入れられしが、老畸人の面を見ず、之を問へば八王子にありと言ふ、八王子ならば車を驅つて過ぎり來しものを、この時われは呆然として爲すところを知らず。

埋火をかき起して爐邊再びにぎはしく少婦は我と車夫との爲に新飯を炊ぎ、老婆は寢衣のまゝに我が傍にありて、一枚の澁團扇に淸風をあほりつゝ我が七年の浮沈を問へり。ふところに收めたる當世風の花簪一世一代の見立にて安物ながらも江戸の見上と、汗を拭きふき銀座の店にて購ひたるものを取出して昔日の少娘のその時五六歳なりしものゝ名を呼べば早や寢床に入れりと言ふ、枉げてその顏見せてよと乞へばやがて出で來りて一禮す。驚かるゝまでに變りてその名にしれし年の數もかさなりて今は十三歳と聞けばなつかしき山百合の、いま幾年たゝば人目にかゝらむなど戯れける中に老婆は他の少娘の、むかしの少娘のとしばへなるものを抱き來りて我を驚ろかせぬ。その名をぬひと呼ぶと聞きて行先人の妻となりてたちぬひの業に家を修むる吉瑞ありと打ち笑ひぬ。時も移りて我は老婆と少娘との紙帳に入りて一宵を過ごしぬこの夜は、七年の刺多き浮世の衣路を忘却し安らかなる眠りに入りて樂しかりけり。

明くれば早曉老鶯の聲を尋ねて鬱叢たる藪林に分け入り舊日の「我」に歸りて夢幻境中の詩人となり、既往と將來とを思ひめぐらして神氣甚た爽快なり。老婆は後庭に植へたる百合數株惜氣もなく堀りとりて我が朝餉の膳に供し、その花をば古びたる花瓶に活けて我が前に置据へぬ。人を市に遣りて老畸人に我が來遊を告げしめ、われに許して彼が秘藏の文庫に入りて其終生の秘書なる義太夫本を雜抽せしめたり。午になれど老人未だ歸らず、我は人を待つ身のつらさを好まねば少娘と其が兄なる少年とを携へて網代と呼べる仙境に踏入れり網代は山間の一温泉場なり、むかし蒼海と手を携へて爰に遊びし事あり、巖に滴る涓水に鑛氣ありければこれを浴室にうつし薪火をもて暖めつゝ近郷近里の老若男女春冬の閑時

候に來り遊ぶの便に供せり。一條の山徑草深くして昨夕の露なほ葉上にのこり、褰ぐる裳も濕れがちに、峽々を越へて行けば昔遊の跡歴々として尋ぬべし。老鶯に送迎せられ、溪水に耳奪はれ、やがて砧の音と欺かれて兎ある一軒の後ろに出づれば仙界の老田爺が棒打とか呼べることをなすにてありけり。こゝは網代の村端にて、これより溪澗に沿ひ山一つ登れば昔し遊びし浴亭森肅たる叢竹の間にあらはれて。この行甚だ樂しからず、蒼海約して未だ來らず、老俠客の面未だ見ず、加るに魚なく肉なく徒らに浴室内に老女の喧囂を聞くのみ。肱を曲げて一睡を貪ぼると思ふ間に夕陽已に西山に傾むきたれば晩蟬の聲に別れてこの桃源を出で元の山路に據らで他の草徑をたどり我幻境にかへりけり、この時絃月漸く明らかに妙想胸に躍り歩々天外に入るかと覺へたり。

樓上には我を待つ畸人あり、樓下には晩餐の用意にいそがしき老母あり、絃月は我幻境を照らして朦朧たる好風景得も言はれず。階を登れば老俠客莞爾として我を迎へ相見て未だ一語を交はさゞるに滿堂一種の清氣盈てり。相見ざる事七年相見る時に驟かに口を開き難し、斯般の趣味人に語り易からず。始めは問答多からず、相對して相笑ふのみなりしが漸く談じ漸く語りて、我は別後の苦戰を說き起しぬ。

この過去の七年我が爲には一種の牢獄にてありしなり。我は友を持つこと多からざりしに、その友は國事の罪をもつて我を離れ、我も亦た孤拳爲すところを失ひて浮世の迷巷に蹈み迷ひけり。大俗の大雅に雙ぶべきや否やは知らねど、我は憤慨のあまりに書を賣り筆を折りて大俗をもつて一生を送らんと思ひ定めたりし事あり、一轉して再び大雅を修めんとしたる時に產破れ家廢れて我が瘦腕をもて活計の道に奔走するの止むを得ざるに至りし事もあり。わが頑骨を愛して我が犧牲となりし者の爲に半知己の友人を過ちたりし事もあり。修道の一念甚だ危ふくわはや餓鬼道に迷ひ入らんとせし事もあり、天地の間に生れたるこの身を訝かりて自殺を企てし事も幾回なりしか、是等の事今や我が日頃無口の唇頭を洩れてこの老知己に對する懺悔となり、刻のうつるも知らで語りき。

しばらくありて老婆は酒を暖め來りて飲まずと言ふ我に一杯を强ひ、これより談話一轉して我幻境の往時に入れり。淡泊洗ふが如き孤劍の快男子(蒼海)この席の談笑を共にせざる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

こそ終生の恨みなり。少婦も出で來り、當時の主人なる無口男も席に進みて、或は舊時の田花の今は已に寡婦になりしを語り、或は近家の興廢浮沈に說き及び、或は我が棲むところを問ひなどしつゝこの夜の興味は沫すべからざる我生涯の幻夢なるべし。就中老母は我が元來の虛弱にて學道に底なき湖を渡るを危ぶみて涙を浮べて我が健全を祈るなど、都に多き知己にも增して我が上を思ふの眞情ありがたしとも尊ふとしとも言はん方なし。

この夜の紙張は廣くして我と老俠客と枕を並べて臥せり、屋外の流水夜の沈むに從ひて音高く、わが遊魂を惹きてなほ深きいづれかの幻境に流し行きて、われをして睡魔の奴とならしめず、翁も亦たねがへりの數に夢幾度かとぎれけむ、むく〳〵と起きて我を呼びこれより談話俳道の事戲曲の事に關にしていつ眠るべしとも知られず。われは眠りの成らぬを水の罪に歸して

　七年を夢に入れとや水の音

と吟みけるに翁はこれを何とか讀み變へて見たり。翁未だ壯年の勇氣を喪はざれど生年限りあればかねて存命に石碑を建つるの志あり、我が來るを待ちて文を屬せしめんとの意を陳ければ我は快よく之を諾しぬ、又た彼の多年苦心して集めし義太夫本我を得て沈滅の憂ひなきを喜び、其沒後には悉皆我に贈らんと言ひければ我は其好意に感泣しぬ。翁の秀逸一二を擧ぐれば。

　夢いくつさまして來しぞほとゝぎす。

　こゝに寢む花の吹雪に埋むまで。

なほ名吟の數多くあり、我他日翁の爲に輯集の勞を取らんとを期す。この夜翁の請に應じて即吟白扇に題したる我句は

　越へて來て又た一峯や月のあと。

曉天の白むまで眠り得ず、翌朝日闌けて起き出でたるはいつの間にか明方の熟睡に入りたりしと覺ゆ。蒼海遂に來らねば老俠と我と車を雙べて我幻境の門を出づ、この時老婆は呉々も我再遊の前の如く長からざるべきを請ふに、この秋再びと契りて別れたり。行くところは高雄山。同伴はおもしろし、別して月も宵にはあるべし、この夜の淸興を思へば涼風盈ちて車上にあり。

批評

○明治政史

富山房より第一冊を發兌せしを見る、指原安三氏が編輯に成る。太政官日誌は今日世人が普ねく見ることを得ざる所ろのものなれば、此書の如き編輯の公けになれるは、甚はだ便利なり。もとより論評を試みず、たゞ事實を在のまゝに列擧したるあれば、讀者に公平を得せしむる爲めに寧ろ可なり。六十六頁、職制定めの表に神祇事務惣督を脱したる、又は、六十九頁、及七十頁に、同事務惣督者の名を分揭したるなどの誤なきにあらねど、要するに明治政史を簡易に知了せんと欲するものゝ爲めには、太はだ便利なる書なり。

○上　代

史海第十四卷に「上代」の一篇見ゆ、曩に久米氏此誌上に於て、祭天の古俗を論じ一風波を起したる后なれば、何となく目新らしく感ぜらる。但だ鼎軒の文如何にも巧みにて一見したる所ろ、神道者をして誤まつて首肯せしむるの辨あり。高天原を大和とし、海原及び綿律見を新羅とし、天降人種を白皙なりとする類は、やゝ創新の斷定なれど、他は之と云ふ目立ちたる奇論あらず、少しく遺憾の心地す。然れども、神道者は寧しろ之を祝すべきか。夫れ、神代の記事はいつ迄も進化論及び歷史哲學の外に藏し置べきものにあらず。室を暗くして而して玆に神靈ありと威すは、十九世紀の士を服するの法にあらざる也。上代研究の途、之より開通せんことを望む。

○歷史家としての新井白石

八月七日國民新聞の日曜附錄に、愛山生が此論文の發端を揭ぐ。彼人、尤とも得意の論題にして、其評眼の亦常にまさる一段の趣あらんとす。第一、白石は歷史家として人生進步の潮流を知り、即はち時なるものの働を辨ぜりと云ふ所ろ、既に凡々を拔く一等の慨あり。

○我國に宣敎師を送るの否を論ず（后進第七號）

尾崎行雄君例の如く壯語大言せり、其「后進」の紙上にのみ揭載せらるゝを祝す。苟くも立憲大臣の候補者を任じて如此き迂論を天下に公告するの勇あるものは尠し。吾人も亦生平日本が外國人の傳道地たるを慨痛するもの也。然れども、マクラール、ブース等が現に、佛に、米に傳道する等の事實を無

みし、如此く獨斷的に暴論し去るの勇は未だあらず。

○武人の虚喝何か有ん亞細亞第五十一號

酷暑炎熱、人多く去れば則はち留まる。三宅君近來「亞細亞」紙上に留まりて快論す。彼の三學者を論評せるもの既に快、武人を罵倒するに至りて更に彌に快なり。此文の中、丁丑の役の巧を非るの一段眞に至論と云ふべし。

○外山正一君の女子敎育敎育報知第三百二十七號

東京女學館の卒業式にて演說せられし筆記なりと云を見る、女學校敎育の大困難として列擧せられたる二つ三つ、扨はわさ〱しき心配のみにて居ますと思はれたり。末段、一男學生、一女生を比較して辨ぜらるゝ處ろ、朗讀文章のあと見えて、ヽ山先生の句調歴々。嗚呼君も亦た文才なる哉。

○二つ三つ

「亞細亞」紙上の明窓淨几欄內…………氏の二つ三つは雄君の倶筆にはあらずや。率直不曲、遠慮と云ふもの絕えて無し。讀ゆきて爽快を覺ゆ。而して一線愛嬌の氣の貫通せるは、作者の意想の無邪氣あるによる。

○尼子義久經濟雜誌第六百三十四號

經濟子、尼子義久を捉へ來りて、人逆境に處するの度量を論ず。云く、蓋し世間單に勝軍の名譽を知りて敗軍の名譽を知るもの少しと。其意もとより今の內閣諸公を一評するにありと雖ども、亦轉じて夫子自ら任ずるの告白として見るべし。吾人は、經濟子が逆境に處するの宜を得るに服するもの也。

文學一斑　透谷生、評

桂園叢書　雲峯子、評

右二文すでに成れりと雖ども、余白なきを以て次に讓る。

片々

可愛子編

明治の青年は改革の雄兵たらざるべからず、將來の運命は、青年の傾向に由りて、其盛衰興敗を決するものも謂はざるべからず、嘲るを勿れ、黄口兒何をか爲すと、吉田松陰を見ずや、松下村塾を見ずや、吾人は青年を愛し、青年を重んじ、一方ならぬ希望を以て其運動を注視するものなり、乃ち相議して、此一欄を以て、全國各青年會の摸樣を報ずるの機關に供し、併せて各青年會が、互に氣脉を通ずるの便宜に供せんとす、筆を執るに先ちて、謹みて青年諸君に告ぐ、曰く、自重と共に謙遜なるべし、剛くあると共に優しくあるべし、運動と共に修養を怠るべからず、柔弱なるを勿れ、傲慢なるを勿れ、浮き足なるを勿れ、眞理と潔白と眞善と公義の味方たれ、而して最後の戰勝者たれ。

明治二十五年夏八月　　此欄の編者識

●中津に於ける非遊廓設置運動　慨然として吾人は屢々報ぜり、豊前中津の地、

遊廓設置の擧ありと、而して今や喜ぶべきの報に接す、曰く該地の青年蹶起して之に反對すと、其運動の第一着歩は、去月二十六日に開きたる演說會にてありけり、同三十日又演說會を開く、聽衆六百餘名、辨士は廣地千九郎、川崎福多、古川林太郎三氏なり、大に會衆の喝采を博し、爲めに同地の輿論を動かしぬ、尙益々盛に運動を試むる筈なりといふ。

●上毛青年會全國廢娼大運動會　同青年會員の中、或は會則に反する者あり、廢娼家の議員にして辭任する者あり、此儘にて經過せば、存娼論の勝を制すにる至るやも知るべからずとて、會員中の慷慨家は、奮起して屢々集會を開き、結局大會の上、(一)會員中不正の行爲なる者を除名する事(二)會員名簿を編製する事、に決せり、而して青年會が目的とする全國の廢娼を期するてふことを實行せんとて、會員二名先づ東北地方に向て遊說することに決せり、其人には石嶋良三郎、關根元哉の兩氏、推撰せられたりといふ。

●名古屋に於ける基督教青年同盟會　六月二十八日名古屋に一新聞顯はる、破廉恥にも、廓新聞の名を以て出でたり、全紙面遊廓の出來事、藝娼妓の履歷、其容貌、其技藝等を記し、若くは讀むに忍びざる人情小說を載す、或は米相場報告の牀を換して廓地娼況の欄を設け、不潔地の狀況を報じ、或は新妓の披露、廣告の依頼に應ずべきことを公言せり、殊に驚くべきは、此卑猥の新聞にして、發行の即日、直に五千枚を賣り盡し、尙求むる者止まず、毎月購買の約を定めし者數十名に及べりとの事なり、而して政府は之に對するの情冷やかにして等閑に看過せり、名古屋の基督教青年は深く之を慨し、七月二日臨時總會を開き、委員三名を撰擧し、先づ警部長の私宅を訪ひ、之に注意を促せり、警部長大に其好意を謝し、且曰く、余も此新聞の風俗壞亂惡むべきを知り、其消失を望むも、如何せん、未だ法律の眼光に於て之を禁止する度までに淫猥の記事あるを認めず、余は既に發行者に忠告する所ありたり、余は第二號發刊の樣子を見て、之が處分をなさんとすと云々と、是れ七月四日の事なり、超へて五日、委員は廓新聞の記者なる安藤一之助といへる人を訪ひ、發行の目的を問ふ、答へて曰く、遊廓の弊風を矯正し、妓樓の陋習を改め、警官の壓制を防がん爲にして、最終の目的は即ち廢娼なりと、委員曰く、君の目的既に然らば、吾人と同感の士のみ、獨り怪む、君の志にして此の如く淸からば、君の目的にして此の如く全からば、何が故に其記事の此の如く淫且猥なるや、君の語と君の筆との衝突表裏、如何に之を解釋するや、請ふ之を聞かん、曰く初號の不完全は自ら知り又自ら耻づ、第二號より必ず面目を一新す可しと、即ち題號を變換すること、新妓の披露又は移樓の廣告等は必ず一切爲さゞること等、數箇條を約し、委員は、矯角殺牛の愚を學ぶと勿れの語を記者に殘して去りぬ、廓新聞第二號九日に發行せり、紙上三箇條を天下に宣言す、曰ふ題號を變換すべし、新妓披露のとは主義上掲載せず、文章は淸潔なる文字を用ゆ可しと、其後に書して曰ふ是れ名古屋基督教青年同盟會の忠告に因て改良せるなりと、然れども幾分の改良は未だ風俗壞亂の批評を免る能はず、青年同盟會は、書を草して更に大に責むる所あらんとす、偶々發行禁止の命、天外より落ち、廓新聞紙然として落命す。

是より先き、一種の童謠四月上旬より名古屋市內に流行す、其言野卑淫猥、語尾必ず「チョンコ」の語を二回連呼す、故に人呼で「チョンコ」節と云ふ、此童謠、無智の社會に流行するのみに止まらず、良家の子弟小學に來往するの途之を唱へ、延て隣縣に及ばんとするに至る、此に於て青年同盟會は之が撲滅に盡力せんとて、總會を開くの通知を會員になせり、此事新聞紙の知る所となり、世上に之を發表せらるゝや、警察は令を傳へて之が童謠を禁止せしめ、學務課は檄を飛して小學校教員等に注意を促す所ありたり、左れど青年會は四月十七日に總會を開き、委員三名を撰びぬ、十九日、委員、警部長を私宅に訪ひ、而して童謠に關する市中の狀況を述べ、且つ曰く、吾々は實に此事の倫理を壞亂し得て餘ある可きを信ず、されど吾々の位置は風俗取締の權なし、只新聞又は演舌に之を責めて、輿論が認めて之を社會に置く可からずとするに至るを待つの他なし、而かも還は實に童謠制止の最良法として取るべからず、只閣下幸に之が取締の方法を一層尤も嚴にせよ、閣下の位地は普く之を制し得るの位地なり、故に深く閣下に請求すと、警部長曰く、童謠に關しては、既に命を屬官に傳へて之を禁ぜしむ、青年會が忠告は深く喜んで之を受く、將來此の如き事件あらば、幸に又忠告する所あれと、委員乃ち謂て曰く、近來市中に於て、深夜娘番付てふものを賣るの徒あり、是れ娼妓鑑の番付なり、請ふ發賣禁止せられよと、警部長は曰く、余は未だ此事を知らざりしと、更に其注意を謝し、取締を嚴にせんとを盟へり、後市中通行の際往々彼童謠を唱へて巡査の叱責を蒙むる者あるを認むと云ふ、吾人は青年會の運動と、警察署が、能く注意するとを喜ばずんばあらず。

●上帝に祈願す　希くは爾の祝福、吾等青年の上にあれ、雲火の天柱もてイスラエルの種族を導き給ひたる如く、吾等の前路を導かせ給へ、大和民族の將來をして爾の聖旨に合ふものとならしめ給へ、主の名によりて、アーメン。」

◎報告者に告ぐ　紙面限りあり、臨時に增すとを得べきも、甚しく超過すると能はず、故に其報告文は、なるべく簡端に、なるべく明白ならんとを望む。」

既に編輯を了る、偶々左の報に接す◆上毛青年、福島に於ての運動、其大畧を見るべし、因て之を掲ぐ、

●福島縣廢娼遊說の概況

M S 生報

吾人は今般上毛青年會の使命を帶び廢娼遊說として東北地方に趣きたり而して目下廢娼論の尤も熾にして尤も多望なる所を福島縣とす依て吾人は先づ第一着に同縣に向て出發し演說に訪問に聊か思ふ所を陳述せり今其の概况を左に記さん

四日　拂曉前橋を發し白河に到る白河は福島縣下屈指の市街にして妓樓七軒あり孰れも相應に繁昌すと云ふ吾人は廢娼論者鈴木義一大高源助兩氏の周旋に依り同夜白河禁酒會堂に於て廢娼演說會を開けり來會者二百余名鈴木氏先づ開會の旨趣を述べ次で石島氏實際的廢娼を說き最後に余は存娼の害を論じ滿堂拍手喝采の裡に散會したり

五日　第一列車にて福島に着す福島は縣廳の在る所にして妓樓十五軒あり皆大厦高屋なり午後縣會議員鈴木三郎兵衞氏を訪ふ氏は議員中唯一の廢娼熱心家にして而かも廢娼建議者の發頭人なり暫時談話の末今后運動の方法を協議せしに氏は餘程の覺悟にて本年は毀譽襃貶に關せず内外より活潑なる運動を試むる積りなりと云へり吾人は點燈頃まで語り合ひ辭して歸宿せり

六日　早朝一致教會牧師和田氏を尋ね氏と共に白石村治氏を訪へり白石氏は監督教會の牧師にして廢娼には非常に熱心なる人也曾て島田三郎氏の福島に來られし時氏と共に廢娼演說をなしたりと云ふ吾人は兩氏の意見を聞き種々相談の上明夜福島座に於て演說會を開くことに決せり歸途同地の有志平島松尾氏を自由黨事務所に訪ひ吾人が廢娼の意見を話したるに氏は大に賛成せらる依て吾人は尙ほ廢娼の爲め盡力あらんことを請ひ歸宿しぬ

七日　午前八時頃和田氏來訪せらる即ち同道して福島民報社員木村卯太郎氏を問ふ氏は熱心なる廢娼希望家也午後又和田氏と共に福島新聞社員鈴木謙氏を尋ぬ氏は始め存娼論者なりしが近來大に感ずる所ありて廢娼賛成者になれりと因て吾人は更らに新聞紙上に於て廢娼の爲め勉められんことを求めたり同夜八時より福島座に於て演說會を開らきしに來集三百五十餘名にして最初に余は「廢娼論」次に石島氏は「公娼廢止說」にて三時間斗り演し十一時二十分頃無事閉會を告げたり

八日　第二列車にて二本松に到る二本松は白河に次ぐの地にして妓樓八軒あり其の尤も大なるものは地租十五圓以上を納むると云ふ晝餐后直に衆議院議員安部井磐根氏を訪ふ然るに生憎なるかな氏は昨日上京したりと依て不得已氏の令閨に會ひ來訪の要領を陳し歸宅後氏に傳言を乞ひ去て縣會議員本間忠藏氏を訪ふ氏は存娼論者也然れども道理上よりは確かに廢娼の可なるを認めつゝある也唯情實上已むを得ずと云へり吾人は斯かる可憐なる者に向て彼れ此れ說くの必要なきを思ひ匇々にして袂を分ちたり同夜柳沼亭に於て演說會を開きしに傍聽者三百餘名余は專ら學理上より石島氏は重に實際上より娼妓公許の廢すべき所以を論ぜり同地は妓樓の昌なる地なるにも拘らず一のノーと云ふものなく中々盛會なりき。

女學生夏期號外

豫てより廣告せし女學生夏期號外は、來る二十一日朝發兌す、原稿既に机上に集る、其題目左の如し、

一休和尙　天知子
孤飛蝶　透谷子
松風夢　禿木子
望夫石　夕軒子
故人　無名氏
英雄　山月子

其價値の如き、今之を言はざるべし、唯愛讀諸氏の淸评にまかす。

●號外一册定價六錢●女學生購讀者には、四錢にて配布に御申越の方には、何人にても四錢にて賣却すべす來る

十五日迄にあれ、地方申込員は特別に廿日迄延期す、

至急御申込し

女學雜誌社　**女學生編輯部**

先般廣告せし「蘇東坡」は、禿木子都合ありて之を出さず、之に代へて「松風夢」の一篇、田舍より郵送せられたり、此旨併せて讀者に謹告す

●雅俗諸體作文口授（鈴木弘恭大人述）●正價金十五錢●郵稅四錢
●婚姻論（横山雅男君著）●正價金十六錢●郵稅四錢
●母のつとめ（三嶋通良君著）●正價金七十錢●郵稅六錢
●子供のはなし（女學雜誌社編輯）●正價金五錢●郵稅二錢
●看護婦美談（久野正香君著）●正價金廿五錢●郵稅六錢
●植物學（寺尾熊三君著）●正價金十錢●郵稅二錢

東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

毛のはへる香油
一名ふけしらず 美人かつら

大瓶 金卅錢
中瓶 金廿錢
小瓶 金十錢

イヨー奇妙〳〵コンナ藥鑵でサヘ毛がはへたから抜毛や薄毛抔は直に澤山毛がはえるに違ひナイ

此美人かつらは極々清淨なる植物油をうすめたるものに髮をこやし毛をはやす効能藥を加へたるものにして男女常に髮化粧に用ゆれば髮をこやし髮の抜け落てはげる事なくしらが赤毛となる事なし又髮のうすきを厚くしほそきを太くしのぼせなどのうれいなくふけやできものなどを生ずる事なし又產後病後などに髮の抜けるときは少しも早く塗用すべし抜け毛を止め毛あしを速くする事妙あり男女殊に髮化粧に最とも適當のものにして髮はさら〳〵としつやをもちねばつきあせ臭き等のうれいなし

東京銀座一丁目つやふきん
電話番號四百七十二番
發賣元 佐々木玄兵衛

正札引なし

新形 流行

○はをり紐 品々
○帯留類 品々
○時計紐 品々
○メリヤス 品々

右ノ外組糸一切御好ニ應ジ精製仕○御進物等ハ美麗ニ調進仕候

組糸老舖 日本橋區よし町 佐竹勝兵衛

○御用ノ節ハ御報知次第參館仕候

每月一日 (後進) 定時發刊

第七號

八月一日發刊●一部金五錢●十部四十五錢郵券代用一割增(五厘切手ニ限ル)

●志望と業務
●陸先輩に答ふ……櫻庭經緯
●我國に宣教師を送るの否を論す……尾崎行雄
●漫言……横井時敬
●何ぞ故郷に歸らさる……厭露子
●平山行藏……櫻庭子
●昔の士風……栗堂生
●菜根譚抄……澤蕾生
●泉岳寺に於ける武士……乾外
●西聞二則……
●俳諧百一人集抄……
●水戸黄門と矢部駿州……古道生
●死せる青年活ける青年……
●其他評林雜報數十件共に皆な活氣鬱勃たり……

東京神田區表神保町二番地に移轉

發行所 國士館

學生募集

●政學部(政治科(邦語)第一年級第二年級ノ入學ヲ許ス(英語政治科)第一年級ノ入學ヲ許ス●法學部(法律科)(邦語英語第一法律科)第一年級第二年級ノ入學ヲ許ス(行政科)(邦語英語第二法律科)第一年級第二年級ノ入學ヲ許ス●文學部(文學科第一年級ノ入學許ス(專修英語科)第一第二第三級ノ入學許ス◎授業時間ヲ改正シ政學部ハ午前法學部文學部專修英語科ハ午後トス◎邦語各科ニ於テハ無月謝ヲ以テ英語ヲ兼修セシム英語教科書ハ都テ貸與◎各部トモ正課目ノ外ニ新ニ參考課ヲ置キ有名ノ博士學士之ヲ擔任ス◎今回新ニ專修英語科第一年級ヲ置キ英學初學者ノ入學ヲ許ス

右來ル九月二日午前九時入校試驗ヲ施行ス

改正學科表各部擔當講師人名表及改正規則書入用ノ向ハ通知次第送致ス

明治廿五年八月

東京牛込早稲田

特別認可 私立 東京専門學校

夏期發兌

少年文庫

大版八十頁 每月十五日發刊

一冊金十錢六冊金五十五錢十二冊金一圓郵税一冊金一錢

宛爲替金拂渡局駒込郵便局

今や酷熱其頂に達し、危坐學理を講じ、議論を闘はすの時に非ず是故に八月十五日發兌の少年文庫第八卷第壹號には、趣味限なく樂み湧くが如きの文を撰みて掲載せり。就中**曲亭馬琴**の一篇には、巻首に其肖像を挿み、其傳其性格、著書を詳述し、**新涼草**は、輕妙の筆を以て佳話三十五種を記し、**慨むべき母子**は、一讀淒然として悲慘を極めたる小説、**落語の掃よせ**は、徳川時代の落語名家の小傳と、其名作數十種を蒐め人をして抱腹絶倒せしむべき事極めて多し以上の四篇皆十頁以上の長文、其他の原稿少年諸君の寄稿數十篇いづれも斬新のものならざるはなし。緑陰風涼きあたり、これを繙きて半日の苦熱を忘れ給へ。

東京府下北豊島郡上駒込村十九番地

少年園

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ペーヂ

定價郵税共金拾錢

吾黨の女子教育成る。巖本善治君の演述又は起草に係ものを編せしものにして。本校教育の精神。期圖。大率れ之に同じく。現今實施する所ろ亦之に異なることなければ。此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すことゝす。

全部十五章

明治女學校に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本編纂……九十二
女體と躰操……百

明治女學校出版

上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君内助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

女學雜誌社發賣

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雑誌社出版書目錄

書名	著者	冊數	正價	郵税
文法口授	鈴木弘恭大人述	全	金拾二錢	金二錢
邦文學	松山高吉君著	全	金二拾錢	無郵税
雅俗諸體 作文口授	鈴木弘恭大人述	全	金二拾五錢	金四錢
徒然草講義	同 講述	一	金八錢	金二錢
參考標注 徒然草拔萃	同 標注著述	全	金貳十錢	金四錢
參考標注 竹取物語讀本	同 著述	全	金貳拾錢	金四錢
標注參考 土佐日記讀本	同 著述	全	金二十錢	金四錢
女學校用讀本 國文抄讀	同 著	五冊	一冊 金二拾二錢宛	一冊 郵税金四錢宛
淺瀨の波	池袋清風大人著	二冊	金三拾錢	金四錢
明治女小學躾草	松田敏足君著述	上下	金四拾錢	金六錢
記事祝文 女子文例	香月恕經君著	全	金二拾二錢	金四錢
漢文抄讀	本村熊二君著	四冊	一冊 金二拾四錢宛	一冊 郵税金四錢宛
婚姻論	横山雅男君著	全	金十六錢	金四錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	全	金十錢	金二錢

書名	著者	冊數	正價	郵税
母のつとめ	三島通良君著	母の巻 子の巻	[illegible]	[illegible]
兒育草	女學雑誌社編輯	全	[illegible]	無郵税
女子生理	同 編輯	全	[illegible]	無郵税
子供のはなし	同 編輯	全	金五錢	金二錢
家政要旨	村木經策君述	全	金五錢	金二錢
家計簿記法	藤尾錄郎君著	全	金二十錢	金四錢
束髪案内	渡邊鼎君著	全	金五錢	金二錢
女學叢書 木村錄子傳	巖本善治君著	全	金八錢	金二錢
貧兒の教育	安東松治郎君著	全	金六錢	金二錢
訓蒙絵双紙 猫と鼠	井上藤平君編	全	金五錢	金二錢
看護婦美談	久野正香君著	全	金貳拾五錢	金六錢
吾黨の女子教育	巖本善治君著	全	金拾錢	無郵税
日本女禮式	坪谷善四郎君著	全	金五十錢	金十二錢
かな習字帖	小野鋼之助君編	三冊	一冊 金拾錢宛	一冊 郵税金二錢宛
文かきふり	同 編	二冊	金三十六錢	金六錢

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下 明宮殿下 御覧濟の書

巖本善治妻譯

再版

（リツトルロード。フホントルロイ）

小公子

小供のよみ本

譯者の序に曰く、母と共に野外に逍遥する幼兒が、幹のくねり、尋常ならぬ一本の立木に指ざして、かあさん、あの木は小さい時誰かに踏れたのですネイ、と申たとか。考えて見ますと、美事に發育すべきものを遮ぎり、素直に生ひ立つ筈の者をくねらせる程、無情なとは實に稀で御座り升。邪道に陷らふとする父の足をとゞめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の德を思ひ起させるは、神聖なる天職を擔ふ可愛の幼兒に限ります。私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者故此珍重すべきまろうどを尙一層優待したいと切に願ふ者です」と。斯る主意にて譯成る。原著は近頃英米に轟き渡り、子供の讀物として愛々しきと潔き事の類ひ無きは更にも言ず、白髮の老者も心頑なの人も、之を讀る間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且尙ほ劇に演して非常の喝采を博しぬ。譯者は斯る原文の味を損せじとて辛苦せられ、紙數二百八十頁密書十四箇入の大本として今日世に進め玉へり。

一冊正價三十八錢〇郵稅八錢也

（批評）〇十一月十五日讀賣新聞〇經濟雜誌五百九十八號〇巖谷季雄君〇十一月十三日報知新聞〇十一月十七日中央新聞〇早稻田文學四號〇國民の友百卅八號〇十一月廿六日國民新聞〇十一月十七日中正日報〇亞細亞廿二號〇護教廿二號〇下田歌子君〇中島俊子君〇石橋忍月君〇一月十六日自由新聞

女學雜誌社

黨報 第十八號

（八月十日發行）

◉黨論

〇內地雜居論……江口三省

〇海外通商論……

◉論說

〇裁可權を論す……山田東次

〇新聞紙の發行停止……金森通倫

〇隣縣の現狀を述て我黨員諸君に告ぐ……小室重弘

◉黨報

代議士會〇水害地慰問〇石川縣爭擾事件陳狀委員〇板垣總理の一行〇星、立川兩氏の一行〇福島に於ける自由黨演說會〇兵神自由俱樂部〇石川縣自由俱樂部〇運動費の義捐〇福島民報〇田村政次郎氏逝く

◉外報

〇英國總選擧の結果〇英國名士の敗北〇ヂルク氏議院に入る〇ブレーン氏の廻文〇デモクラット黨の黨議〇亞爾然丁の新大統領〇希臘新內閣〇ペルー內閣の更送〇ブルガリヤの大獄

◉時事

〇松方伯〇二子〇殘留の五大臣〇大勢〇元老會〇會合〇亂高下〇伊藤伯〇山縣伯〇高島子〇樺山子〇後藤伯〇武力〇愚な待望〇有朋〇政治と商業〇愼重〇岡澤陸軍次官〇尙友會〇何を意味するか〇法典〇爆裂彈〇薩長〇安場知事〇警部長及郡長〇東洋自由黨〇國民協會〇才子〇石川縣の血雨〇洪水と海嘯〇日米用達會社〇時事日記

芝公園內

自由黨黨報局

東京英和女學校學生募集廣告

一 本校は來る九月六日より開く
一 地位 高燥空氣新鮮にして閑雅の風趣蓋し都下に冠たり
一 校舍も潔く用水殊に清し建築亦頗る健康に適す
一 目的 廣く日本女子の爲め基督教の主義に基きて高等なる普通教育を授く
一 學課 普通學部を分ちて本科別科の二となし別科は撰科として業を授く
一 職業部 日本女子の爲に最有用なる職業を授く
一 音樂部 ピアノ オルガン 琴
一 教師 外人四名 本邦人十四名
一 校醫 定時必ず來診す
一 書籍室 東西の雜書及ひ新聞雜誌を備ふ
一 寄宿舍 老練誠實なる内外國婦人數名を以て取締となし監督の責に任す
一 來る九月六日午前九時より入學試驗を行ふ
一 學課等詳細の事は載せて本校規則にあり御入用の諸君は郵券二錢御送附あれ

東京市赤坂區青山北町
東京英和女學校

入學志願者ハ齡廿二年已上普通教育アリ身躰健全品行方正ナル婦女ニシテ九月十日迄ニ申込アレ但在學ハ二年間學資ハ食費而已ニシテ授業料ヲ要セズ規則書入用ノ方ハ貳錢切手ヲ送付アレ

京都烏丸上長者町
京都看病婦學校

林學士 星野愼之輔君著
昆蟲植物金石
採集法
小形洋綴美本 正價金八錢 郵稅金二錢

發賣元 女學雜誌社

本校ハ校舍完備土地高燥市街ノ雜沓ヲ避ケ眞ニ教育ノ良地也本校ハ學科ノ程度ヲ低クシ之ヲ授クルニ老成ノ教師ヲ以テシ務メテ應用ノ力ヲ養ハシム
本校ハ次學年ヲ九月十一日ニ始メ各科共入學ヲ許ス
志願者ハ八月中ニ願書ヲ出スベシ規則書ハ貳錢ヲ要ス

大阪東成郡清堀村
私立 浪華女學校

女學部設立廣告

來ル九月十二日ヨリ特ニ女學校ヲ開キ内外國女教師主トシテ教授ヲ擔任シ懇切ニ左ノ諸學科ヲ授ク
英語 音樂 和漢學數學等
編物 裁縫 造花及其他ノ手藝
入學所望者ハ九月五日六日午前八時ヨリ十二時迄ノ間ニ參校ノ上委細問合セヲルベシ

東京市麹町區飯田町四丁目
私立 自由英文學院

●女學生募集

本會ハ會員少女撰修手藝ノ四科中ニテ普通高等女學志願者ハ勿論既婚晩學ニテ充分修學ノ暇ナキ婦女ヘモ適宜ノ學藝ヲ授ケ賢才良母ノ養成ヲ期ス●外國人三名内國人十名ノ專門教員各科ヲ擔任ス●豫備前期新募ス以上高等科迄缺員アリ●志願者ハ九月八日迄ニ申込ベシ

大阪道修町貳丁目
大阪婦人學習會

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

正價金廿八錢
郵稅四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば玆に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて百人一首それ〳〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得る至極重寶なり。

發兌元　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目	瑞穗屋卯三郎
同　錦町二丁目	武藏屋藤藏
同　尾張町二丁目	東海堂
同　彌左衛門町	嚴々堂
同　表神保町	東京堂
同　出雲町	警醒社
同　鐵砲町	指金堂
同　元富士町	盛春堂
同　雉子町	團々社
福岡縣福岡	積善館支店
神奈川縣橫濱市	共同新聞發賣會社
同　同	万字堂
京都佛光寺烏丸	東枝律書店
同　新町竹屋町	便利堂
大坂本町四丁目	岡島支店
同	福音社
神戶元町四丁目	福音社
函館市	福音社
熊本縣熊本	草野門平
京都新町二條	大黑屋書店

女學雜誌市內賣捌店

麴町區上六番町	日盛堂
同　三番町	梅仙堂
同　同	福音舍
同　飯田町	三文字屋
同　同	洗心堂
神田區神保町	松江堂
同　同	青柳堂
同　雉子町	大塚書籍店
牛込區神樂町	積善堂
同　同	正導舍
同　肴町	深田彌兵衛
本鄉區弓町	文字堂
同　同	就本堂
同　富士前町	解明堂
同　同	盛春堂
同　二丁目	古河屋
下谷區東黑門町	三一堂
神田區松岡町	山口次郎
同　旅籠町一丁目	榎本
同　鍋町	清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目	庭花堂
芝區櫻田本鄉町	鈴木新兵衛
同　南佐久間町	栗原
同　同	鈴木
赤坂區新町	赤川市兵衛
同　同	飯田
京橋區尾張町	鈴々木
同　出雲町	金盛堂
同	山田屋
本鄉區天神町	改進堂
神田區小川町	大塚雜誌店
同　錦町二丁目	莨故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

女學雜誌第三百二十號より改正仕り同號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上も改正致度候間舊號迄の**雜誌代金**至急御拂込相成度候。爲替は**麴町郵便局**へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

一新誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事

一雜誌及ひ書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十册	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六册(半年)	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二册(一年)	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

六册	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三册(半年)	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六册(一年)	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一册 金六錢　郵稅 金五厘

廣告料及無料廣告

一行	一回	(廿七字詰)	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部 注文を要し以上半頁每に十部增と定む。

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三